

ドイツ産業革命以降の生活改革運動と
その文化的影響に関する総合的研究

(課題番号) 11610526

平成11年度～平成13年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)) 研究成果報告書

平成14年4月

研究代表者： 副島 美由紀
(小樽商科大学 言語センター)

この研究は、平成11年度～平成13年度の科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))を受けて行われたものである。なお、研究組織、研究代表者、研究経費等は以下のとおりであり、次項以降が「研究成果」の報告である。

「研究組織」

研究代表者：副島 美由紀 (小樽商科大学 言語センター)

「交付決定額(配分額)」

(金額単位：千円)

	直接経費	間接経費	合計
平成11年度	700	0	700
平成12年度	900	0	900
平成13年度	800	0	800
総計	2400	0	2400

「研究発表:学会誌等」

1. 副島 美由紀:

「モダニズムが夢見たユートピア:ドイツ田園都市建設の歴史(2)—労働者コロニーの建設」、小樽商科大学「人文研究」第97輯(135-160頁)(1999)

2. 副島 美由紀:

「モダニズムが夢見たユートピア:ドイツ田園都市建設の歴史(3)—E・ハワードに先んじたドイツの田園都市構想」、小樽商科大学「人文研究」第100輯(179-209頁)(2000)

3. 副島 美由紀:

「モダニズムが夢見たユートピア:ドイツ田園都市建設の歴史(4)—ヘレラウの誕生—」、小樽商科大学「人文研究」第103輯(153-173頁)(2002)

「研究成果による工業所有権の出願・取得状況」

なし

「研究成果」

目次

1. 研究の目標と内容
2. ドイツ世紀転換期の生活改革運動
 - 2-1. 背景
 - 2-2. 菜食主義運動
 - 2-3. 菜食主義運動
 - 2-4. 禁酒運動
 - 2-5. 裸体運動
 - 2-6. 芸術教育運動
 - 2-7. 土地改革と入植運動
 - 2-8. 田園都市構想
 - 2-9. ドイツ田園都市協会の誕生
3. 住宅改革の歴史
 - 3-2. 労働者住宅の“発見”
 - 3-1. 住宅改革運動の課題
 - 3-3. ベルリンの労働者住宅
 - 3-4. イギリスの前例
 - 3-5. ドイツの代表的労働者コロニー
 - 3-5-1. ミュールハウゼン
 - 3-5-2. クルップ・コロニー
 - 3-5-3. グミンダースドルフ
 - 3-6. コロニーと生活改革運動
4. E・ハワードに先んじたドイツの田園都市構想
 - 4-1. 社会改革者テオドール・フリツチュと土地改革論
 - 4-2. “未来都市”の様相
 - 4-3. 理想都市計画の系譜
 - 4-4. “未来都市”と反ユートピア・反ユダヤ主義
 - 4-5. 田園都市構想から国家構想へ
5. 田園都市ヘレラウの誕生
 - 5-1. “ヘレラウの子供たち”
 - 5-2. カール・シュミットとドレスデン・クラフト工芸工房
 - 5-3. ヘレラウの始まり
 - 5-4. ダルクローズ学校とヘレラウの芸術教育
 - 5-5. 芸術家コロニー
 - 5-6. ヘレラウの試練
6. 今後の研究計画

1. 研究の目標と内容

「ドイツ産業革命以降の生活改革運動とその文化的影響に関する総合的研究」は、ドイツ近代史、特に文化史の研究分野に属するものである。ドイツ近代の文化史研究と言うと、これまで主にヴァイマル時代の文化を中心に行われてきたが、そのヴァイマル文化を準備したとも言える生活改革運動に関してはこれまでほとんど学問的に論じられたことがない。というのもドイツ文化史の研究は従来芸術および政治の次元をあまり離れることなく行われてきたからである。しかし文化史はもっと下部構造と近い領域の問題に関しても論じられる必要がある。ドイツの生活改革運動は、19世紀後半に急激に進行した産業革命によって生じた社会の歪みを是正する試みであり、それは住宅改革、土地改革、田園都市運動、菜食主義運動、裸体運動、芸術教育運動、衣服改革、女性運動等々の様々な社会改革運動を総括的に含んでいる。それは近代を迎える過渡的な試練の過程で起こったものだが、その理念の源流は実はヨーロッパの伝統的なユートピア思想にある。よってこれらの生活改革運動の歴史を全般的に研究することにより、ルネサンス時代から始まりヴァイマル時代のモダニズムへと至るヨーロッパ、特にドイツの社会改革思想の脈流について考察することが本研究の目標である。具体的な研究内容に関して言えば、1) まずドイツにおける生活改革運動の様々を紹介すること、2) その中心的課題である住宅改革の歴史に焦点を当てること、3) さらにあらゆる生活改革運動の理念が結実する場所と言われた田園都市建設運動を検証することが必要であった。よって以下では、その3点を中心とした研究成果の紹介を行っている。

2. ドイツ世紀転換期の生活改革運動

2-1. 背景

イギリスより約半世紀遅れて産業革命が始まったドイツは、19世紀の半ばに急激な経済成長期を迎えた。それに伴い多くの社会問題が発生したが、特に深刻な問題となったのが人口の農村離脱と都市への流入である。人口の自然増及び行政区改正の結果も影響して、19世紀半ばから後半にかけてドイツ国内では都市人口の急激な増加が起きている。ある統計によると、人口10万を超えるドイツの大都市数は1850年の2から1904年の41に、¹また全人口に占める大都市人口の割合は1871年の4,8%から1910年には21,3%に増加している。一方人口2千以下の地域に住む住民は1871年の64%から1910年には40%に減少し、²人口の流入したベルリンでは1907年の住民中、ベルリン生まれの者は40,5%に過ぎなかったという。³都市は構造改革を必要としていたが、邦国の王都か重商主義の都でもない限り町はほぼ中世時代のままで、それらの都市でも公共建築物の整備に比べて住宅建築は大

¹ Krabbe, Wolfgang R., *Gesellschaftsänderung durch Lebensreform*. Göttingen, 1974, p.16.

² Linse, Ulrich, *Ökopax und Anarchie*. München, 1986, p.14f.

³ *ibid.*, p.15.

大きく立ち後れていた。急激な地価の高騰を反映して⁴大都市には“賃貸兵舎”と呼ばれる高層の粗悪な団地アパートが多く出現するようになる。これらの住居は狭い上に下宿人を置かなくては支払いが困難なほど家賃が高く、1880年のベルリンでは22%の住居に下宿人や同居人が居たという。一つの部屋に6人以上が寝起きすることも珍しいことではなかった。

5



ベルリンのアパート街 (1900 頃)



“賃貸兵舎”アパートの内部 (1900)

国の経済発展と中産階級の成長の裏側で“大衆貧窮”が進行していた。人口の流出した農村部では十分な労働市場を提供する経済活動が困難になる一方で、大都市では過密人口による都市問題が深刻化してゆく。不衛生で劣悪な住環境と食生活の変化による疾病が増加し、犯罪率の上昇や性道徳の低下など、労働者階級の“粗暴化”も顕著になってくる。都市には“水頭症”“文化のペスト腺種”“牢獄”といった汚名が着せられ、⁶大都市嫌悪の風潮は工業化批判や工業化を推進した学問に対する批判と結びつき、文化ペシミズムとなって社会全体に拡がっていった。

19世紀後半に始まったドイツの生活改革運動(Lebensreformbewegungen)はそのような背景のもと、1880年頃から社会的広がりを見せるようになる。それは住宅改革、土地改革、入植運動、菜食主義、自然療法、裸体運動、芸術教育運動、禁酒運動、衣服改革、女性運動、婚姻生活改革、表現ダンスなど様々な状況改善の試みの総称で、その共通の目標は、農村に人口を還元して産業革命以前にあったとされる社会的調和を取り戻し、自然と結びついた生活を送ることにより産業の機械化によって低下した人間の価値を回復することであった。

そしてこれらの様々な生活改革思想が最も確実かつ有益に結実する場所として、後に田園都市の構想が生まれることになるが、まず以下において、代表的な生活改革運動の中から菜食主義運動、禁酒運動、裸体運動、芸術教育運動、土地改革運動、そして入植運動を紹介し、その連関を把握しながら田園都市運動への流れを追ってみたい。

2-2. 菜食主義運動

⁴ 1860年代から90年代にかけてのベルリンの地価は30倍にもなっている。Krabbe, *ibid.*, p.17.

⁵ *ibid.*, p.21f.

⁶ *ibid.*, p.14f.; Fritsch, Theodor, *Die Stadt der Zukunft*. Leipzig, 1896, p.5.

菜食主義は生活改革運動の中でも最も古い歴史を持つものである。西洋においてヴェジタリアンの祖と呼ばれているのは実は数学者のピタゴラス(A.D. 580-500)で、彼の菜食の思想は古代エジプトの宗教とゾロアスター教の影響下にあると言われている。“ピタゴラスの教え(Pythagoräismus/pythagoräische Lehre)”という言葉は1850年代に“Vegetarianism”という用語が定着するまで“菜食主義”と同義であった。⁷近代の菜食主義は、食生活の変化による疾患克服のための食養成という側面も当然持ち合わせてはいるが、その理念は古代の菜食主義と同様宗教に根ざしており、17、18世紀のプロテスタント宗派が厳格な聖書解釈によって楽園追放以前の菜食生活を再発見したことに始まっている。菜食主義は次第にアングロサクソンの文化圏、特にセヴンスデイ・アドヴェンティストや長老派、クエーカー教徒等の間で広まっていった。最初の菜食主義協会がイギリスに誕生したのは1847年で、長老派の生理学者シルヴェスター・グラハム(Sylvester Graham)が創案したグラハム・ブレッドやセヴンスデイ・アドヴェンティストの医学博士ジョン・バーヴェイ・ケログ(John Harvey Kellogg)によるシリアル食品等、この頃の産物である健康食品は少なくない。『生活改革による社会変革 Gesellschaftsänderung durch Lebensreform』(1974)の著者、クラッベによると、ピタゴラス時代の菜食主義と近代の菜食主義の相違点は倫理的基準に加えて栄養学的な観点があるかどうかにあるのではなく、時代の要請によって組織的運動になり得たかどうかにあるという。⁸

ドイツにおける菜食主義運動の特徴は、牽引役となったのが3月革命の闘士達であったことである。ルソーの影響を強く受けたグスタフ・フォン・シュトルーヴェ(Gustav von Struve, 1805-1870)やフランクフルト憲法制定会議の民主派議員だったエドゥアルト・バルツァー(Eduard Baltzer, 1814-1887)等で、彼等は1848年の革命挫折の後、生活改革に政治活動の代替物を求めたとされており、⁹それぞれ菜食主義協会を設立し、著作活動¹⁰を通して菜食主義理論の確立に努めた。特にドイツ菜食主義運動最大の理論家であり自由教会派の牧師でもあったバルツァーは、人類が果実を主食とすべく創造されたという教義を説き、自然との調和という観点からあらゆる殺生を禁じて家畜を使用しない農業と動物愛護を奨励した。精神と魂の器である肉体をいかにして清浄に保つかという問題だった菜食主義は、次第に自然環境を視野に入れた世界観的な広がりを持つようになる。バルツァーの教えによれば菜食主義とは個々人の内面において自然との近縁性を高める抽象的なユートピアであると同時に社会的な改革でもあり、菜食主義者達はこの運動があらゆる生活改革の中で最も高次で徹底した段階であるという自負を持っていた。¹¹その後バルツァーの影響を受け、菜食と動物保護による生態平和の福音を説く説教師達が現れるようになる。『新しい信

⁷ Baumgartner, Judith, Ernährungreform—Antwort auf Industrialisierung und Ernährungswandel. Frankfurt a.M., 1992, p. 93.

⁸ Krabbe, *ibid.*, p.51.

⁹ *ibid.*, p. 57 ; Baumgartner, *ibid.*, p.94.

¹⁰ Balzer, Eduard, Die natürliche Lebensweise, 4 Bde., Nordhausen, 1867-1872.
Struve, Gustav von, Pflanzenkost: die Grundlage einer neuen Weltanschauung. Stuttgart, 1869.

¹¹ Krabbe, *ibid.*, p.48.

仰(Neuer Glaube)』(1895)を出版し、H・ヘッセに影響を与えたと言われている¹²シュヴァーベンの思索家クリスティアン・ヴァーグナー(Christian Wagner)や、モンテ・ヴェリタのアウトサイダー的求道者グスト・グレーザー(Gusto Gräser,1879-1958)¹³等、“自然食運動の使徒(Kohlrabi- Apostel)”と呼ばれる探求者達である。また、当時はいわゆる“疑似宗教のインフレ時代”でもあった。東洋思想やカバラの影響を受けた神智学やゾロアスター教の再興運動であったマズダ教等も菜食・禁酒・動物愛護を奨励しており、人智学のR・シュタイナーも穀物を中心とした食事と環境平和的農業を推進しようとしていた。¹⁴

人間らしい理性的な生活と自然の法則に即した経済活動の探求は、当時影響力を持っていたダーヴィニズムとも矛盾しないものだった。菜食主義は反近代主義者のみならず進歩主義者達にも受け入れられるようになり、1892年には「ドイツ菜食主義同盟(Deutscher Vegetarierbund)」が個々の地方組織をまとめて全ドイツ的組織となる。その翌年スイスに誕生した菜食主義者の入植協同組合「ハイムガルテン」や、ベルリン郊外にできたドイツ最初の入植運動「果樹園コロニー・エデン」、またシュタイナーやヘッセ等が集ったアスコーナのモンテ・ヴェリタ、フリードリヒスハーゲンの文学サークルから生まれた「新共同体(Neue Gemeinschaft)」等はみな菜食主義を信条としていた。そして後述するように、「ドイツ田園都市協会」は主にこの「新共同体」の理想主義者達によって創設されるのである。

第一次大戦後はしかし多くの生活改革運動が影響力を失い、菜食主義運動も下火になってゆく。エデンとモンテ・ヴェリタを除くと当時のコロニーはすべて1920年頃までに経営難による破綻を迎えた。が、革命時の民主派が推進した菜食主義運動はそもそもロマン主義と革新的な敬虔主義という二つのドイツ的伝統に立脚したものであり、地上における千年王国的ヴィジョンの世俗化された形態はその後も様々な形で顕れることになる。例えば指導者待望の心理は“自然食運動の使徒”達によって第一次世界大戦を越えて担われていき、¹⁵菜食主義運動は70年代に入って新たなエコロジー運動として再生する。また、革新的な理想の実現に向かうドイツ的伝統の力を、我々は現在も「緑の党」のようなオールタナティヴ運動に窺うことができるのである。

2-3. 禁酒運動

後述するような“大都市脱出”や菜食主義のようなイデオロギー変革を伴わずして生活改善を可能にする方法として、禁酒運動は重要な生活改革運動の一つであった。原理的な源は菜食主義と同じく清教徒的禁欲主義にあり、1826年ボストンでの節酒協会設立以来、運動はプロテスタント圏内を中心としたヨーロッパに拡大していった。教会主導型であった当初の運動に代わって学問的見地に基づいた近代的禁酒主義が登場してきたのは、飲酒

¹² Linse, *ibid.*, p. 63f.

¹³ Linse, Ulrich, *Barfußige Profeten: Erlöser der zwanziger Jahre*. Berlin, 1983, p.68ff.

¹⁴ Baumgartner, *ibid.*, p. 74, 91.

¹⁵ Linse, Ulrich, *Barfußige Profeten: Erlöser der zwanziger Jahre*. Berlin, 1983.

Hesse, Hermann, *Die Morgenlandfahrt*, in Hermann Hesse, *Gesammelte Werke*, Bd.8, Frankfurt a. M. 1970.

の習慣が産業化社会の諸問題を反映して変化していった1880年代半ばのことである。当時アルコール受容の中心が以前の火酒から瓶入りビールに移り、ビールの消費量が半世紀の間ほぼ3倍に増加するという変化が起きていた。醸造業の大規模化が大量消費を可能にし、北ドイツ同盟における職業の自由化によって酒場の数とリキュール類の消費量も同時に増えている。¹⁶社会には代替となる娯楽が少なく、労働者にとって酒場以外に社交の場を見いだすことは困難であった。アルコール問題は大都市問題とも密接に結びついていたのである。ドイツにおける近代的禁酒運動の中心となった団体、「ドイツ暴飲対策協会(Deutscher Verein gegen den Mißbrauch geistiger Getränke)」、「青十字節酒協会(Mäßigkeitsverein des Blauen Kreuzes)」、「国際禁酒協会ドイツ支部(International Order of Good Templars)」等は、以下のような国民経済上・公衆衛生上の4つの見地から、禁酒・節酒運動を展開してゆく。

1. 生理学的見地：飲酒は体質の弱体化をもたらす。
2. 人種主義的衛生学的見地：飲酒は遺伝的疾患をもたらす。
3. 国民経済的見地：健康で屈強な国民のみが国際的競争に勝ち得る。
4. 心理学的見地：飲酒をしない者の方が、生活と労働に対して建設的である。¹⁷

ドイツにおけるダーヴィニズムの提唱者であるエルンスト・ヘッケル(Ernst Haeckel)も所属していた「ドイツ暴飲対策協会」は、教育、栄養問題、住宅問題等、その他の生活改革の分野と関連した節酒啓蒙活動を行い、アルコール中毒矯正施設や娯楽施設の建設といった現実的なプログラムにより持続的な禁酒の定着を狙った。1902年、協会は下部組織にあたる「ドイツ居酒屋改革協会(Deutscher Verein für Gasthausreform)」を設立し、娯楽施設を公有化してその領域からアルコールを遠ざけ、喫茶店やアルコールを置かない飲食店を増やし、さらには都市に図書室や談話室を設置するなどの運動を展開している。¹⁸この頃からドイツにおける禁酒運動は労働運動や社会民主主義運動、芸術教育運動や青年運動等と関わる広がりを持つようになるのである。

社会民主党の代表として1919年オーストリア首相に、さらに後年は連邦大統領になるカール・レナー(Karl Renner, 1870-1950)は、1905年に誕生したプロレタリア的旅行クラブ「自然友の会(Die Naturfreunde)」の創立メンバーであるが、後年この運動を回顧して次のように語っている。「プロレタリアは(...)自然からも締め出されていた。(...)夜は外気も入らず光もささないあばら屋に押し込められ、昼は産業監督官の目もめつたに届かない工場や作業場に集められるプロレタリアが、途中の休憩時間に頼みにするものといえば、居酒屋の小部屋であり、アルコールという慰めだった。プロレタリアにとっては自然を、つまり力と美の無尽蔵の源泉を持つ自然を、人間の精神によって徐々に秘密を暴かれてきた驚くべき法則を持つ自然を、奪い返すことも重要なことだったのだ。」¹⁹アルコールを手にする代わりに「自然の中に出てゆく」ことを労働者に勧奨した「自然友の会」の自然への信頼を裏打ちしていたのは、ブルジョワ的なヴァンダーフォーゲルや民族的な郷土保護運動におけ

¹⁶ Baumgartner, *ibid.*, p. 98f.

¹⁷ Krabbe, *ibid.*, p.38.

¹⁸ *ibid.*, p. 41ff.; Baumgartner, *ibid.*, p.100.

るような新ロマン主義よりもむしろ世俗化されたダーヴィニズムの進歩思想だった。レナーは社会民主主義の観点から、多種多様なプロレタリア文化団体の擁護者となる。

青年層のための啓蒙活動を展開したのは「国際禁酒協会」である。²⁰社会制度としてのアルコール消費に着目したこの団体は、青年組織を形成して若年層を早くから啓蒙することでアルコール依存の潜在的可能性を最小限に止めようとした。1888年以來労働者や手工業者、学生や高校生に対する活動を行い、1914年には1800の支部に6万の会員、600の青年組織に3万の会員を有し、ドイツ最大の禁酒運動団体となっている。後述する芸術教育運動の雑誌「芸術の番人(Kunstwart)」及びその活動団体である「デューラー同盟」も禁酒を支持していた。

田園都市のアルコール対策は「ドイツ田園都市協会」のプログラムにはっきりと明示されている。イギリス式一戸建て住宅の建設は換気や採光に気を配った住宅改善を可能にし、各戸に設置された庭は余暇を自宅で過ごす可能性を生み、情操面での生活改善に役立つはずであった。酒場の数を制限して飲酒を抑制し、コンサートホールや図書館の建設によって芸術教育を行うこともその重要な目標の一つであった。²¹現に田園都市ヘレラウに居酒屋と呼ばれ得るものは一件しかない。

2-4. 裸体運動

裸体運動は1854年、スイスの自然療法医アルノルト・リクリ(Arnold Rikli)が自分の療養施設に設けた日光浴場から派生したと言われている。以降、自然療法及び菜食主義の広まりと共に日光・空気浴場も流行し、同時に裸体運動も社会に広まっていった。それは健康上の運動であると同時に肉体的なものに対する過少評価や羞恥心を克服して肉体と精神の調和のとれた発達を目指す社会運動でもあり、その理念は当然ヴァンダーフォーゲルのような青年運動や表現ダンス運動等と通底するものである。

裸体運動の代表的推進者として挙げられるのは、ヨハネス・グットツァイト(Johannes Guttzeit)、リヒャルト・ウンゲヴィッター(Richard Ungewitter)、ハインリヒ・プードア(Heinrich Pudor)、画家のカール・ヴィルヘルム・ディーフェンバッハ(Karl Wilhelm Diefenbach)とその弟子フィードゥス(Fidus, 1868-1948)等で、特に裸体を多く描いたフィードゥスの作品は有名である。が、これらの運動家は実によく活字を利用して観念的な啓蒙活動を行っていた。中でも重要なのは雑誌「力と美(Kraft und Schönheit)」(1901)の創刊であり、それは「ドイツ理性的体力増進協会(Deutscher Verein für vernünftige Körperzucht)」のための機関誌の役割を果たした。協会は後にハンブルクやフランクフルトにも支部を持ち、名誉会員にドイツ参謀総長のフォン・モルトケを擁する「ドイツ身体文化協会(Verein für Körperkultur)」となる。²²

¹⁹ Linse, *Ökopax und Anarchie*. p. 50.

²⁰ Krabbe, *ibid.*, p. 45f.

²¹ Schollmeier, Axel, *Gartenstädte in Deutschland*. Münster, 1988, p.68.

²² *ibid.*, p. 94.

ヌーディスト達は多くが菜食主義者でもあり、いわゆる“自然食運動の使徒”達であった。特に雑誌「新しき人間(Der neue Mensch)」の編集に加わっていたヨハネス・グットツァイトは菜食主義グループ「ピタゴラス同盟(Pythagoräerbund)」(1884)を設立し、「自然の伝道者(Naturprediger)」を自認していた。チュニカと呼ばれる長衣を身に纏い、新たな倫理観を説く予言者然とした彼等は文学者達の関心を引く。フィードゥスと同様フリードリヒスハーゲン文学サークルに関わったゲアハルト・ハウプトマン(Gerhart Hauptmann,1862-1946)は、グットツァイトをモデルにした短編「使徒(Der Apostel)」(1890)の中で倫理的菜食主義を唱えながら日光による裸体の浄化と解放を信じる若き宗教家を描き出している。自らが救世主だという幻想に取り付かれた求道者のモチーフは、後年「愚かなるキリスト者エマヌエル・クヴァイント(Der Narr in Christo Emanuel Quint)」(1910)へと発展することになる。また、トーマス・マンの「予言者の家で(Beim Propheten)」(1904)に登場するのは好奇心と暇を持て余した都会のインテリ達に救済の教えを説く尊大な説教師達だ。ミュンヘンのルードヴィヒ・デルレート(Ludwig Derleth)がモデルであると言われているこの短編は、当時の“貸貸兵舎”内の狭苦しい住居の様子も巧みに描写している。同じくマンの「神の剣(Glaudius Dei)」(1904)や、アスコーナのグスト・グレーザーを登場人物の雛形とするヘッセの「東方巡礼(Die Morgenlandfahrt)」(1932)等、世紀転換期の“インフレ聖者達”や千年王国への憧憬を題材にした文学作品は多い。作家達も「黙示録的な興奮状態」²³を共有していたのである。



ディーフェンバッハ
(1851-1913)とフィー
ドゥス(1868-1948)
(1888頃)



「空気・日光・太陽浴をノ」
フィードゥスの素描(1901)

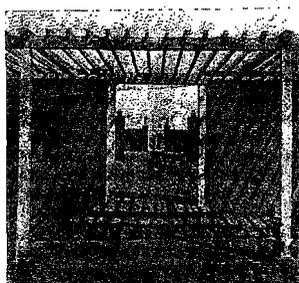
裸体主義者の雑誌として次に挙げるべきは、ハインリヒ・プードア(Heinrich Pudor,1865-1941)の「美(Die Schönheit)」(1903)である。官能に対する健全な思考の涵養を目的としていたこの雑誌は、ナチスの芸術に関するイデオロギーを準備することになる²⁴カール・ハインリヒ・シュトラッツ(Carl Heinrich Stratz)の『女性の人種美(Die Rassenschönheit des Weibes)』(1901)やパウル・シュルツェ-ナウムブルク(Paul Schulze-Naumburg)の『婦人服の基礎としての女性の身体文化(Die Kultur des weiblichen

²³ Linse, Barfüßige Profeten, p. 28.

²⁴ 副島美由紀「近代《病理》のイコノグラフィー」in:小樽商科大学『人文研究』第91輯,1996, p. 189-194.

Körpers als Grundlage der Frauen Kleidung)』(1902)といった著書を高く評価していた。²⁵その後プードアの思想は肉体の解放といった側面から肉体的な克己による人格形成といった教育的側面に重心を移していく。²⁶

1910年、ヘレラウの建築・芸術監督委員会は、コミュニティが推進すべき芸術としてダンスを選び、リズムと音楽による新たな身体教育プログラムを持っていたダルクローズ学校を誘致する。この新しい共同体は恐らくプードアにとって理想的な活動の場であったろう。ヘレラウ移住後、彼は「美」に関わっていたブルーノ・タンツマン(Bruno Tanzmann, 1878-1939)と共に「ハーケンクロイツ出版社」を設立し、民族的思想の普及に努めることになる。²⁷タンツマンは芸術教育家フェルディナンド・アヴェナーリウスに詩作を認められて活動を開始した作家で、やはり民族主義的教育に関心を持っていた。そして20年代初めに農業学校を設立して文字通り“血と大地”のイデオログとなるのである。²⁸田園都市における人種対立の種は早くから蒔かれていた。



ヘレラウ、ダルクローズ学校の日光浴場



ヘレラウのリトミック体操

第一次世界大戦後、裸体運動(Nacktkultur)はある種のいかがわしいイメージを払拭するためヌーディズム(Freikörperkultur)と名前を変えて復活する。そして公営のスポーツ施設や体育大学を生み出してゆく大きな身体文化の流れに合流してゆくのである。その意味で裸体運動は生活改革運動の中で最も広範な効果をあげた運動だと言えよう。ハリー・ケスラー伯爵の有名な日記の中から1930年の記述を引用してみよう。彼はある日外務次官に連れられてベルリンの体育大学を見学に行く。後にベルリン・オリンピックを指揮するカール・ディーム博士が1920年に設立した学校である。その時の印象を彼は次のように記している。「広々した校内には陽光が燦々と降り注ぎ、各種のスポーツの練習に励む殆ど裸体に近い若者達の活気がみなぎっていた。その明るい光と暖かく香しい空気に包まれての印象はまさにギリシャ的であった。(…)裸体、光、空気、そして誤った羞恥心や綺麗事なしに、生を、肉体的完全を、感覚を讀える生き方。現代の若者にあつて、肉体が、肉体にまつわる現実が、この運動の波に従っている様子は驚嘆すべきことでもある。今日の若者達は戦前の若者達と較べるとなんと美しいのだろう。人々が裸体で歩くことを恥ずかしがらなく

²⁵ Die Schönheit, 18. Band, Heft 3, p.49 ; Krabbe, ibid., p. 95.

²⁶ Pudor, Heinrich, Erziehung ohne Bücher, in: Die Schönheit, 18. Band, Heft 3, p.37-39.

²⁷ Sarfert, Hans-Jürgen, Hellerau: Die Gartenstadt und Künstlerkolonie. Dresden, 1992, p.91.

²⁸ Fasshauer, Michael, Das Phänomen Hellerau: Die Geschichte der Gartenstadt. Dresden, 1997, p. 256.

なって以来、民族の肉体は花と開いたのだ。」²⁹

生活改革運動が本来の政治的急進性を発揮することなく政治に手なずけられていったというウルリヒ・リンゼの見解³⁰は正しいだろう。が、労働者のための都市計画の重要性を説いた建築家のオットー・マルヒ(Otto March)の「彼等の栄養力と防衛力は国家の関心事である」³¹という発言にも表れているように、生活改革運動の思想自体に社会ダーヴィニズムもしくは富国強兵の理念に転化してゆく要素が内在していたことも、見逃してはならない事実である。

2-5. 芸術教育運動

産業化社会がもたらした文化ペシミズムを乗り越えて国民が健全な理想主義的感情を取り戻すためには、何らかの精神的改革が必要であった。菜食主義の世界観や新しい身体文化の創出等と並んで、芸術教育家達も新たな情操教育の必要性を説いた。学問や科学における分析主義的細分化や合理的概念的な主知主義に対し、芸術の分野で最初に批判の声を上げたのは、ユリウス・アウグスト・ラングベーン(Julius August Langbehn, 1851-1907) である。彼は著書『教育者としてのレンブラント(Rembrandt als Erzieher)』(1890)³²において、レンブラントの絵画に見られる光の明暗に象徴されるような内面的な非合理性を芸術の本質と見なし、個人存在の内実を表現するための芸術教育の必要性を説いた。しかし彼の称揚する「ドイツ精神の原則としての個人主義」が、それを統合して一つの壮大な文化に作り上げるための基盤として考えられていたことは、まさに当時の社会心理の反映であると言えよう。ドイツは国民の一体化を可能にする文化的スタイル、特に民族的な絆を必要としていた。ラングベーンの著作の影響は大きく、それは「新たな芸術時代の到来を宣言した」³³とまで言われている。生活改革運動における芸術への希求は、この時思想的な支柱を得て現実的広がりを見せるようになる。

例えば入植運動の草分けは、実はラングベーンの影響を受けたとされるヴォルプスヴェーデの芸術家達であると言われているが、³⁴芸術教育は入植運動にとって最初から不可欠な要素であった。この頃イギリスでは手仕事の有する人間形成的意義によって労働と生活と芸術の調和を目指したアーツ・アンド・クラフツ運動が興っていたが、その影響もあってドイツにおける芸術教育運動も労働者を含めた国民全体を対象としたものだった。リヒャルト・ヴァーグナーの甥で作家のフェルディナンド・アヴェナーリウス(Ferdinand Avenarius, 1856-1923)は「芸術の番人(Kunstwart)」(1887)を創刊して安価な芸術出版物を多く発行し、芸術運動組織「デューラー同盟(Dürerbund)」(1903)を興している。「デューラー同盟」は郷土芸術運動の最も重要な発言者となった。彼が支援した若き芸術家達の中にはゴットフリート・ケラーやヴィルヘルム・ラーベ、マックス・クリンガーやフーゴ・ヴォ

²⁹ Graf Kessler, Harry, Tagebücher 1918-1937. Frankfurt a.M. 1996. p. 674.

³⁰ Linse, Ökopax und Anarchie. p. 20.

³¹ Hartmann, Kristiana, Deutsche Gartenstadtbeuung. München, 1976, p.16.

³² Langbehn, Julius, Rembrandt als Erzieher. (61-66. Auflage) Leipzig, 1925, p.48.

³³ Hartmann, ibid., p. 16.

³⁴ Krückemeyer, ibid., p. 30.

ルフ等がいる。オーストリアの教育者ユリウス・ライシング(Julius Leisching) もやはり 1887 年、ハイキング・サークルから発展した芸術活動グループ、「ウィーン芸術友の会(Die Gesellschaft der Wiener Kunstfreunde)」を作っている。身体文化に基づいた情操教育の一例である。

教師を主体とした組織的運動へと芸術教育運動を拡大し、学校教育の場に浸透させたのがハンブルク美術館の初代館長アルフレート・リヒトヴァルク(Alfred Lichtwark,1852-1914) である。彼は 1896 年「学校における芸術教育促進教員連盟(Die Hamburger Lehrervereinigung zur Pflege der künstlerischen Bildung in den Schulen)」を組織し、「ディレクタントの育成が純粋な芸術能力を促進する」³⁵という理念から芸術愛好家の底辺の拡大に尽力した。

田園都市運動は当然芸術教育に関しても意欲的であった。アヴェナーリウスもリヒトヴァルクもプロパガンディストとして「ドイツ田園都市協会」に参加している。また、同協会の会員でプロイセン商務省付の建築家であったヘルマン・ムテズィウス(Hermann Muthesius,1861-1927)も芸術運動の重要な推進役の一人であった。ムテズィウスは 1896 から 7 年間イギリス大使館に勤務した間、建築の空間構成が人格に与える影響の大きさを痛感するに至る。帰国後イギリス式一戸建て住宅建設の推進に努め、居住空間の美こそ芸術教育の始まりであると主張して芸術家の間に物議を醸した。³⁶住居の質的改善を図ることが国民の精神的レベルを向上させるという信念を持っていた彼は、リヒャルト・リーマーシュミット(Richard Riemerschmidt,1868-1957)、ハインリヒ・テッセノウ(Heinrich Tessenow, 1876-1950)と並んでヘレラウ建設に関わる 3 人の重要な建築家の一人となる。ヘレラウの子供達は改善された住居に住み、ダルクローズ学校でリトミック体操を学び、放課後「ドイツ・クラフト工房(Deutsche Werkstätten)」や芸術家コロニーのアトリエに通って工芸を学ぶことになるのである。³⁷

2-6. 土地改革と入植運動

1922 年、バーデン・ヴュルテンベルクの牧師ラインホルト・プランク(Reinhold Planck)はその著書の中で次のように記している。「もしビスマルクが理想的な現実的政治家であったならば....、生まれて間もない帝国に大都会の土地投機という試練を与えるなどあり得ないことだろう。この土地投機は大土地所有による東エルベの土地封鎖と結びつき、田舎の人々を大都会へと追い立てて都市の新住民を増大させ、彼等が無防備のまま不労所得の、つまり取引所の、食いものにされるにまかせた。」³⁸ 月革命の際に「大土地所有者権益擁護同盟」を結成してユンカー勢力の結集を図ったビスマルクに対する批判である。プランクの父でマウルブロン神学校長でもあった哲学者のカール・クリスティアン・プランク(Karl Christian Planck,1819-1880)は、『あるドイツ人の遺言(Das Testament eines

³⁵ A・リヒトヴァルク、『芸術教育と学校』岡本定男訳、明治図書、1985、p.166.

³⁶ Hartmann, *ibid.*, p. 132.

³⁷ Theil, Carl, *Neue Schule Hellerau*, in: *Die Schönheit*, 18. Band, Heft 3, p. 35-37.

³⁸ Linse, *ibid.*, p. 23f.

Deutschen)』(1881)その他を著してローマ法ならぬドイツ法による土地改革案を提唱した人物である。ドイツ法とは土地を社会の共有財産となし、個人的利用のためにのみ個々の家族に委託するという古代ゲルマンの土地利用法であるが、抜本的な住宅改善を行うには土地改革、しかも土地の公有化が必須であるという認識はリベラルな住宅改革派の間には早くから存在していた。

ドイツにおける最初の住宅改革論者と呼ばれるヴィクトール・エメ・フーバー(Victor Aimé Huber,1800-1869)はシュレジアの織工一揆と3月革命を経た1848年に、また菜食主義の理論家エドゥアルト・バルツァーも1873年の著作『社会改革案(Ideen zur sozialen Reform)』の中で既に土地の公有化を訴えている。が、80年代になって土地改革論議に弾みをつけたのは土地問題の最初の体系的理論家と呼ばれるアメリカのヘンリー・ジョージ(Henry George)(1839-1897)であった。地代をすべて国庫に入れる単一税の導入と土地の国有化を説いた『進歩と貧困(Progress and Poverty)』(1879)は、出版の翌年ドイツ語に翻訳されて土地改革論者の反響を呼んだ。1886年、リベラル派による最初の土地改革グループ「土地連盟(Landliga)」が資本の集中と大土地所有の関係を断ち切るため土地の国有化を提唱する。また民族主義派の陣営でも“ヒトラー以前の最大の反ユダヤ主義者”³⁹と言われるテオドル・フリッチュ(Theodor Fritsch,1853-933)が社会保守的な目的において土地の公有化案を提示していた。⁴⁰にも拘わらず、彼等の要求は社会の上層部に顧みられることがなかった。

この間、公正な土地利用の方策を探る人々要求は高まってゆく。1889年、帝国議会でも有限責任協同組合法が成立し、住宅建設組合や入植組合などが宅地開発に関与できるようになる。前述の菜食主義者コロニー、ハイムガルテンやエデンはこのような組合組織であった。また、ハワードにも影響を与えたクロボトキンの社会主義的入植理念がグスタフ・ランダウアー(Gustav Landauer,1870-1919)によってアナルコ・ソーシャリスト達にもたらされ、1890年頃から公有地の占拠も含めた様々な入植運動の動きが活発化する。

入植運動は言わば生活改革と青年運動の混合のようなもので、農業ロマン主義と大都市敵視とが結びついて1920年代までに起きた集団的な大都市離脱現象である。また、土地改革運動や資本主義経済批判とも相互補完的な役割を果たし、テオドル・ヘルツカ(Theodor Hertzka,1845-1924)、⁴¹フランツ・オッペンハイマー(Franz Oppenheimer,1864-1943)ズィルヴィオ・ゲゼル(Sylvio Gesell,1862-1930)⁴²といった共同体運営の理論家を生む。それぞれのコロニーはキリスト教や反宗教主義、民族主義、無政府主義、菜食主義、身体主義などどれも複数の信条を掲げていたが、土地資本主義に抗する土地の公有化要求はどの共同体にも共

³⁹ Phelps, Reginald H., Theodor Fritsch und der Antisemitismus, in : Deutsche Rundschau, 87/1961, p. 443.

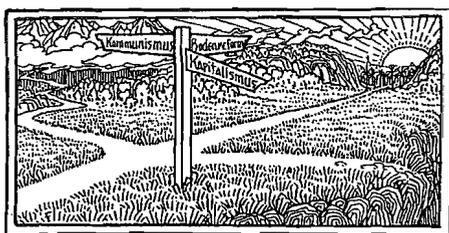
⁴⁰ Fritsch, Theodor, Die Stadt der Zukunft. p.15.

⁴¹ ヘルツカの理想郷については以下に紹介されている。ルイス・マンフォード『ユートピアの系譜：理想の都市とは何か』関裕三郎訳、新泉社、1983、131-140頁；川端香男『ユートピアの幻想』、1971、潮出版、p. 160f.

⁴² ニーダーザクセン州の「緑の党」発起人ゲオルク・オットーは、ゲゼルの運動から緑の象徴を受け継いだと主張している。Linse, ibid., p. 168.

通した理念だった。

土地改革運動が何らかの社会的影響力を持つようになるのは、「土地連盟」の後身「ドイツ土地改革同盟(Bund deutscher Bodenreformer)」が土地の国有化というラディカルなスローガンを取り下げて中道路線を取るようになってからのことである。新しい改革方針の推進役となったのは、後にヴァイマル憲法の起草者となるフリードリヒ・ナウマン(Friedrich Naumann,1860-1919)と共にドイツ国民社会党の創設に加わり、積極的に政治活動を行っていたアドルフ・ダマシュケ(Adolf Damaschke,1865-1935)である。ダマシュケの掲げた目標は、国の基盤となる土地を公共経済的財産として扱い、投機や不労所得の対象にすることなく有効利用せしめるような法の元に置くことだった。その具体的対策として同盟が要求したのは、公共経済的地価の導入、地価上昇分への課税、休閒地の収用許可等である。ダマシュケはリベラル派に理念の後退を非難されながらも『土地改革(Die Bodenreform)』(1906)等の著作活動を通して土地問題に対する社会的認識の高まりに貢献し、後に“土地改革の父”⁴³と呼ばれるようになる。しかしながら同盟が達成できたことは多くはなかった。1911年、帝国議会は上昇地価分への課税を決定するが2年後にそれを撤回し、法の運用を各州に任せてしまう。同盟の要求中、休閒地の収用と永小作権、永使用権の確保は1918年のヴァイマル憲法と1920年の帝国住宅建設法によって認められたが、それはリベラル派が批判したように、労働者の住宅問題に本質的に関わるものではなく、⁴⁴改革とはとうてい言い難いものであった。土地を国民の共有財産とし、良質の住居を計画的に安定供給するという当時の進歩的な改革案は、結局実現しなかったに等しい。上述の告白を行ったラインホルト・ブランクは、社会民主主義政党もこの点においては1918年の革命以後何一つ変更を加えたことがなかったという失望を述べている。結局彼は「公共の土地所有権という原則」を実行してくれることをナチスに期待するようになるのである。⁴⁵



「第3の道」資本主義と共産主義の間に土地改革の道がある。フィードゥスの素描(1901)



理想の入植地を描いたマックス・シュルツェ・ゼルデの絵画(1920頃)

土地改革は生活改革の根幹に関わり、社会改革及び社会保守の両派が共に支持した理想であったにも拘わらず、その反資本主義的性格故に最も効果をあげることが少なかった運

⁴³ Winters, Peter Jochen, Wie kann man die Bodenspekulation eindämmen?, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung Nr. 152, 6. Juli 1971, p. 20.

⁴⁴ Linse, Ulrich (Hrsg.), Zurück o Mensch zur Mutter Erde. München, 1983. p. 27.

⁴⁵ Linse, Ökopax und Anarchie. p. 24.

動である。恐らく土地をめぐる状況は、100年前の協同組合にまだ改革の夢があったことを除いては今日も当時とさほど変わってはいないだろう。二つの田園都市を成功させたイギリスでも、戦後の社会福祉国家ヴィジョンによるニュータウン計画は労働党と保守党の両政権の間で揺れ動き、結局1978年に放棄されている。⁴⁶1908年、土地の公有化を待たずにヘレラウの建設が始まった時、工場用地以外の土地を所有したのは「有限会社ヘレラウ田園都市協会」と「ヘレラウ住宅建設組合」の二つの公益団体だった。⁴⁷

2.7. 田園都市構想

人間が集まって定住し都市が形成されるという過程は有史以来地球の至る所で綿々と生起してきた現象であるが、住環境である外的空間と自らの憧憬に満ちた内的空間との乖離が大きくなると人々は理想都市を夢想し、それを語り記すことによって改善への希望を未来に託そうとしてきた。ペロポネソス戦争後のアテナイを反映したプラトンの『国家』やルネサンス期の星状型理想都市像、宗教改革前夜の夢とも言えるトマス・モアのユートピア国、また産業革命後の空想的社会主義ユートピア等々を例として挙げることができよう。モダニズムのユートピアとも言うべき田園都市の建設運動も、ひとつの著書がもたらした影響によって起こった。それは1898年にイギリスのエベネザー・ハワード(Ebenezer Howard, 1850-1928)が著した『明日の田園都市 Garden Cities of To-morrow』⁴⁸で、その田園都市構想は諸外国にも紹介され、多くの国に「田園都市協会」が誕生することとなった。ハワードはイギリス議会の速記係であった時代に自由党左派の「探求協会」といったサークル活動を通してアメリカの土地改革論者ヘンリー・ジョージによる土地の国有化論に触れ、またアメリカの作家エドワード・ベラミー(Edward Bellamy 1850-1898)による空想的社会改革小説『顧みれば』⁴⁹の社会主義的思想にも大きく影響を受けている。彼の田園都市構想はそれら先駆者たちの社会改革思想を融合したものだが、それが社会に広く受け入れられた理由は、ダイヤグラムを多用するなどして分かりやすく具体的な都市構想としてまとめられた点にあった。詳しくは『明日の田園都市』に見ることができるが、その理念は以下の3点に要約することができる。

1. 自治体自体が都市地所のすべてを永久に所有し統制するような人口約3万の小規模都市を造る。
2. その公有地に私企業を誘致して共同体内を職・住一致の場とする。
3. 住宅は庭付きの一戸建てを旨とし、都市部に緑地帯を多く設けると同時に都市の

⁴⁶ 東秀紀『漱石の倫敦、ハワードのロンドン：田園都市への誘い』中央公論社、p.162-165.

⁴⁷ Rössger, Mirjam, Die Baugenossenschaft Hellerau, in: Dresdner Hefte 15. Jahrgang, Heft 51.p.41.

⁴⁸ Howard, Ebenezer, Tomorrow: a peaceful path to real reform. London, 1898. (reprint, edited by Richard Le Gates and Frederic Stout) London 1998. (1902年にGarden Cities of To-Morrowとして再版される。) エベネザー・ハワード『明日の田園都市』長素連訳、鹿島出版会、1968.

⁴⁹ Bellamy, Edward, Looking Backward, Boston, 1888, エドワード・ベラミー『顧みれば』山本政善訳、岩波文庫、1953.

周囲に不可侵の農業地帯を設置する。それによって産業と農業の共存を図る。

ハワードは『明日の田園都市』を出版した翌年の1899年に田園都市協会を興し、その構想はレッチワース(Letchworth)とウェルウィン(Welwyn)の二つの都市建設によって実現を見ている。ドイツにおける田園都市建設運動は1908年のドレスデン近郊における田園都市ヘレラウ(Hellerau)の建設によって歴史的な足跡を残した。しかしイギリスの田園都市が常に学問研究の対象であったのに対し、ドイツの田園都市運動の歴史に対して学問的関心が払われるようになったのは1968年にハワードの名著がドイツで再版されてからのことであり、⁵⁰また真に実証的な研究が可能になったのはドイツ統一後、ユートピアをめぐる言説が東独時代のタブーから解放されてからのことである。しかしイギリスの田園都市建設と比べ、芸術教育運動などその他の生活改革運動と結びついていたという点において、最終的には頓挫することになったドイツの田園都市建設運動の方が実はより意欲的で広範な改革運動であったと見ることができ、その歴史的検証はドイツの社会が希求してきた共同体像の歴史的推移を理解するにあたり、新たな視座を与えてくれるものである。

2-8. ドイツ田園都市協会の誕生

ハワードの田園都市構想は1900年にドイツに紹介されている。まず社会民主党の機関誌「新時代(Die Neue Zeit)」が『明日の田園都市』の書評を載せ、⁵¹2年後の1902年には「ドイツ田園都市協会(Deutsche Gartenstadt Gesellschaft;以後DGGと略記)」が誕生することになる。DGGの母体は入植運動コミュニン的一种である「新共同体 Neue Gemeinschaft」で、それは「フリードリヒスハーゲン文学サークル」を形成していたハルト兄弟(Heinrich und Julius Hart)やE・ミューザムらの文芸批評家および作家たち、また政治活動家のカンブフマイアー兄弟(Paul und Bernhard Kampffmeyer)、アナルコ・ソーシャリストのグスタフ・ランダウアー、ブルーノ・ヴィレ(Bruno Wille)やヴィルヘルム・ベルシエ(Wilhelm Bölsche)等の汎神論的エコロジスト達を中心として形成された。「新共同体」はシャルル・フーリエによる19世紀初頭における空想上の共同体「ファランステール」に理想像を求めると同時に禁酒・肉食主義、自然療法主義、ヌーディズムといった19世紀末特有の生活改革要素を持ち併せており、またアンリ・ファン・デ・ヴェルデによる指導を仰ぐなどして芸術教育にも関心を持っていた。よってその改革志向にはもとより田園都市構想と共通するものがあつたが、自然回帰的新ロマン主義や民族主義的要素による擬似宗教的プログラムが災いして結成からほどなくして解体し、ベルリンの商人ハインリヒ・クレープスを通じてハワードの田園都市思想を知ったハルト兄弟とB・カンブフマイアーが、入植運動の理想を託すかたちでDGGを設立することになる。⁵²

⁵⁰ Posener, J. (Hrsg.), E. Howard, Gartenstädte von morgen: Das Buch und seine Wirkung. Berlin/Frankfurt a. M. /Wien, 1968.

⁵¹ Krückemeyer, *ibid.*, p. 22.

⁵² Schollmeier, Axel, *ibid.*, p. 58; Linse, Ulrich, *Ökopax und Anarchie*. München, 1986, p. 35, 65f; Hartmann, Kristiana, *Deutsche Gartenstadtbewegung*. München, 1976, p. 27.

DGGの創設メンバーにはハルト兄弟、ランダウアー、⁵³ベルンハルト・カンプフマイアー、ヴィレ及びベルシェ、フィードウス、入植理論家のオッペンハイマー、「果樹園コロニー・エデン」のリーダーとなるオットー・ヤキシユ(Otto Jackisch)等がおり、⁵⁴初代の会長はハインリヒ・ハルト(Heinrich Hart,1855-1906)であった。田園都市構想においてDGGのメンバーを最も強く引きつけたのは、その土地公有化理論であった。H・ハルトはそのプログラムに、「DGGの目標は、都市および農村の公有地を基盤にした田園都市の建設理念およびその目的に有益なあらゆる対策の促進に対する理解を広めることである。DGGが奨励するのは、農地の経済的に調和のとれた分配とその都市部との共存を貫徹するような入植地の開墾である。DGGが目指すものは、産業の農村部への組織的な移転による住環境改革であり、そこでは産業の要請も十分に考慮した衛生的で美的な広範囲の建設が可能となるはずである。(…)現在のあらゆる生活改善思想が、田園都市において最も確実かつ有益に結実する。」⁵⁵と記している。また1904年フランクフルトで開催された最初の「ドイツ住宅会議」においても、DGGは住宅・定住問題に関して土地改革の必要性を強調したテーゼを発表し、「住宅改革は都市人口の分散と計画性のある宅地開発を伴って初めて可能となるのであり、そのためには土地の公有化が不可欠である」と説いている。⁵⁶しかし土地の公有化要請を掲げたDGGはそのユートピア的な性格のためか多くの支持を得られず、「感動的ではあるが国民経済的には甘い考え」との批判を受けた。⁵⁷転機が訪れたのは1907年、建築家のハンス・カンプフマイアー(Hans Kampffmeyer)がその従兄弟で二代目会長であったベルンハルト・カンプフマイアーからその職を引継ぎ、大都市批判を共通項とする様々な改革の関心を吸引して現実路線を取るようになってからのことである。⁵⁸彼らが提唱した“土地と住居の自主管理権が保証された自治体の形成”や、換気や採光に配慮した庭のある住宅といった住居改善方法、また共同体用のコンサートホールや図書館の建設といった文化的プログラムには実行可能性があった。田園都市思想は生活改革運動思想の最も進化した器としてドイツ社会に徐々に浸透していき、第一次大戦前にはケーニヒスベルク、ベルリン、ハンブルク、マグデブルク、ルードヴィヒスハーフェン、マンハイム、ニュルンベルク、ミュンヘン、ヴェルツブルク、シュトゥットガルトその他の都市に「田園都市協会」が誕生してそれぞれが田園都市建設を検討していたと言う。⁵⁹そして最初に田園都市建設に着手したのが、ドレスデンの企業家カール・シュミット(Karl Schmidt,1873-1948)であり、誕生したのが田園都市ヘレラウである。

⁵³ Linse, Ulrich, *Organisierter Anarchismus im Deutschen Kaiserreich von 1871*, Berlin, 1969, p. 88.

⁵⁴ Hartmann, *ibid.*, p. 135.

⁵⁵ Schollmeier, *ibid.*, p.57.

⁵⁶ *ibid.*, p. 60.

⁵⁷ *ibid.*, p. 63.

⁵⁸ Schollmeier, *ibid.*, p. 61.

⁵⁹ Krabbe, Wolfgang R., *ibid.*, p. 31.

3. 住宅改革の歴史

3-1. 住宅改革運動の課題

DGGの意欲的なプログラムにも伺えるように、住宅改革は生活改革運動全体にとって特に重要な課題であった。田園都市建設の他にも具体的な住宅改革が様々に行われてきたが、産業革命以降に起こったこれらの住宅改革の中心的関心は、低所得者のためになるべく廉価で良質な住宅を提供することであった。上述の企業家カール・シュミットにとっても、田園都市建設の目的はまず何よりも自らの家具工場である「ドイツ・クラフト工芸工房 (Deutsche Werkstätten für Handwerkskunst GmbH)」の労働者たちに質の良い住宅と安定した職場を提供することにあった。そしてシュミットの周りには特に低所得者用の住宅建設に関心を持つ建築家たちが集まるようになり、田園都市ヘレラウの建設が開始される。ベルリンではペーター・ペーレンス (Peter Behrens, 1868-1940) やブルーノ・タウト (Bruno Taut, 1880-1938) といった前衛的建築家が好んで労働者住宅建設に携わるようになり、芸術教育運動が目指していた「芸術と民衆の一体化」⁶⁰が建築の場でも徐々に進んでいくようになる。モダニズムが芸術の分野に浸透してゆくのに、これらの建築家たちは重要な役割を果たしたと言えるだろう。

ヘレラウの建設には二つの手本があった。イギリスの田園都市レッチワースと、ドイツの労働者コロニーである。労働者コロニー建設は田園都市建設以上に住宅改革の歴史上大きな役割を果たした事業であり、後者は前者の発展的形態であるということが出来る。よって住宅改革運動の過程を把握するためには、労働者コロニー建設の事業を回顧することがまず必要でなる。

3-2. 労働者住宅の“発見”

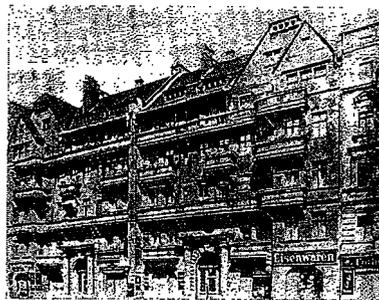
19世紀の後半、ドイツの大都市に生じた住宅問題については既に述べたが、住宅問題が社会問題として顕在化するまで賃貸アパート等の低所得者用住宅建設は建築家ではなく左官屋の仕事と考えられていた。1841年、ベルリンで労働者住宅のためのコンペが行われた時、建築家同盟は「そのような課題は建築学的魅力に欠ける」という理由で参加を拒否している。住宅問題が深刻化してきた1891年ですら、多くの建築家が労働者住宅建築は芸術的に魅力のない仕事と考えていた。⁶¹ 彼らの意識に変化をもたらしたのは、1870年頃から始まった住宅改革や土地改革等の生活改革運動である。「社会政策協会 (Verein für Socialpolitik)」, 「ドイツ公共衛生促進協会 (Deutscher Verein für öffentliche Gesundheitspflege)」, 「住宅改善協会 (Verein für Wohnungsreform)」といった団体や、1889

60 ブルーノ・タウトの「建築綱領」(1918)より。In: Uwe Schneede (hrsg.), Die Zwanziger Jahre. Köln, 1979, p. 72.

61 Fritz Neumeyer, Bauräger und Baustil: Baugenossenschaften und Werkwohnungsbau in Berlin um 1900, in: Ekkehard Mai (hrsg.), Kunstpolitik und Kunstförderung im Kaiserreich. Berlin, 1982, p. 309.

年の帝国協同組合法成立を受けて設立された建築協同組合の活動により、建築家達の目は次第に低所得者用の住宅建築に向かうようになる。しかも「大衆のための芸術」を目指した芸術運動等の影響により、内的機能に即した芸術性の探求がそのような住宅建築にも求められるようになっていった。

「賃貸兵舎 (Mietskaserne)」と呼ばれた高層賃貸アパートの改善に最初に取り組んだのは、プロイセン政府の建築マイスターでフリードリヒ・シンケル賞の受賞者でもあるアルフレート・メッセル (Alfred Messel, 1853-1909) である。彼は 1892 年、著名な土地改革論者アドルフ・ダマシュケらが組織する「ベルリン建築・住居共同組合 (Berliner Bau und Wohnungsgenossenschaft)」の依頼により賃貸アパートを建設する。それは低所得者の共生という目的を建築的に反映した初めての総合的デザインとして注目を浴びた。



アルフレート・メッセルによるベルリン建築・住居共同組合のアパート (1893)

この「ベルリン建築・住居共同組合」に属していた住宅改革者のハインリヒ・アルブレヒト (Heinrich Albrecht) は、1892 年ベルリンで初めての「労働者住宅設計図展示会」を開健し、建築家達に労働者住宅建築への参画を促す。また 1896 年に小冊子『労働者住宅 (Das Arbeiter Wohnhaus)』を出版し、メッセルのデザインを載せて住宅改革に関する理論的基盤の確立に貢献した。自ら労働者コロニーやズィードルングの建設に携わったブルーノ・タウトはメッセルの影響を認め、自らの仕事を「メッセルの理念の縦承」とであるとさえ語っている。⁶²



「労働者住宅」に載ったメッセルによる労働者住宅のデザイン (1896)

62 *ibid.*, p. 311.



ペーター・ベーレンスによる AEG の社宅 (1911)

新時代の工場建築で知られるペーター・ベーレンスも、中産階級の住宅を模倣した労働者住宅を批判し、労働者住宅に合目的性と真の芸術性を与える必要性を説いた。メッセル同様、協同組合が体现しているような「共生の精神を構造的にも表現できるような建築」⁶³を目指したベーレンスは、1911年 AEG（一般電気株式会社）のための社宅を建設する。このようなベーレンスの理念は彼の事務所にはヴァルター・グローピウスとミース・ファン・デル・ローエに引き継がれる。かつてブルジョワジーが「労働者」を発見したように「労働者住宅」を発見した若き建築家たちは、そこに擬古典主義的建築との訣別の可能性を見ていた。ムテズィウスは1906年、次のように語っている。「現在のドイツにおける市民的な建築美術を特徴づけるものは、近い将来手に入るはずの健康への願いである。その展望は明るい。個々の分野ではすでに春の到来を告げる徴が見られる。特に労働者住宅建築の分野がそうである。」⁶⁴こうして1900年頃から徐々に建築美術の前景に出てきた労働者住宅は、市民的幸福の物理的な器としてモダニズムの普及に大きな役割を果たしてゆくのである。

3-3. ベルリンの労働者住宅

住宅改革に対する理念が労働者住宅や建築組合住宅などの分野で生かされるようになったとは言え、都市における上質で廉価な住宅建設は容易ではなかった。特にイギリス、オランダ、北西ドイツ等の水平家屋文化圏と較べ、中部ドイツから東欧にかけての垂直家屋文化圏⁶⁵では、理想とされたイギリス式一戸建て住宅の実現はより困耗であった。とりわけベルリンでは家屋一棟当たりの居住者数が高く、当時建設された建築組合住宅の例にも見られるように、高層アパート建築からの脱却はほぼ不可能であった。ベルリン近郊で広い敷地を持つ労働者コロニーの建設が始まったのは、好景気と生産工程の刷新、鉄道や船舶等の交通手段の発達等により産業の郊外移転が起こった1895年頃のことである。

63 *ibid.*, p. 313.

64 Schollmeier, Axel, *ibid.*, p. 49.

65 Josef Stübgen 著 "Der Städtebau" (Darmstadt, 1890) によると、ヨーロッパには北フランス、オランダ、北西ドイツからイギリスへと広がる水平家屋文化圏と、南欧諸国、フランス中南部、中部ドイツから東欧にかけての垂直家屋文化圏が存在するという。In: Brian Ladd, *Urban Planning and Civic Order in Germany, 1860-1914*. London, 1990, p. 150.

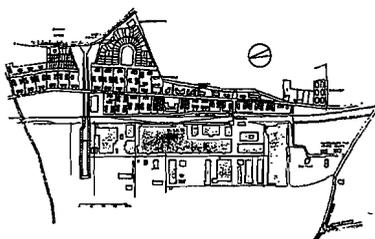
1895年、アルパート・ボルズィヒの機械工場がモアビート衝からテーゲルに移転し、同時に400戸の労働者住宅が建設される。また、1900年には機関車と魚雷を製造する「ベルリン機械製作株式会社」がベルリンから25キロの郊外に労働者コロニー・ヴィルダウを造っている。これらの住宅は工場との近接性において労働者にとって有利であったのみならず、当時の個人経営のアパートより広くて衛生的で、家賃も普通より20～50パーセント低かった。

また当時のプロイセンの法律が郊外の住宅地開発に公共施設の建設を義務付けたことから、ヴィルダウのコロニーにも学校、商店、スポーツ施設等が備わっていた。労働者コロニー建設の目的は安定した労働力を確保することと労働者の生活に物質的・精神的安定をもたらすことであった。しかし労働契約の締結を条件とする住宅への居住が工場への依存度を高めるうえ、企業指導型の福祉が労働者管理機関となってしまう危険性もあった。それまで大都市生活者だったベルリンの労働者達は大家族的なコロニー運営に抵抗を感じ、また社民党、労働組合、社会政策協会などは経営者指導型の福祉政策に懐疑的だった。1902年、ボルズィヒ社の住宅のうち社員が居住していたのは約半数に過ぎなかったという。⁶⁶

家屋一棟当たりの平均居住者数 (1910)

ドイツの都市		その他の都市	
ブレーメン	7.8	マンチェスター	4.9
フランクフルト	17.1	ロンドン	7.9
エッセン	17.6	リエージュ	6.7
ケルン	18.1	アントワープ	8.1
シュトゥットガルト	18.6	ハーグ	6.5
デュッセルドルフ	19.1	アムステルダム	13.4
ハノーファー	20.0	フィラデルフィア	5.4
ライプツィヒ	27.4	シカゴ	8.8
ドレスデン	34.6	パリ	38.0
ミュンヘン	36.6	プラハ	40.9
ハンブルク	38.7	ブダペスト	41.3
ポーツェン	51.8	ウィーン	50.7
ブレスラウ	52.0		
ベルリン	75.9		

Rudolf Eberstadt, Handbuch des Wohnungswesen und der Wohnungsfrage. (Jena, 1920) より

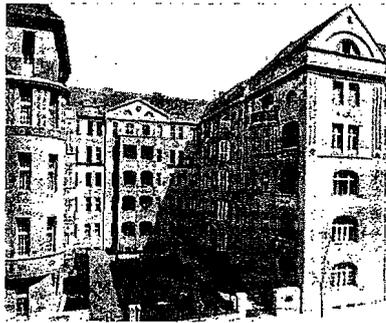


労働者コロニー・ヴィルダウの見取り図。体育館やプールがある。(1900)

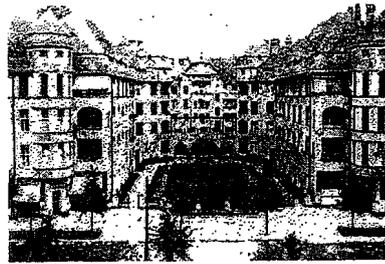


労働者コロニー・ヴィルダウの住宅

⁶⁶ Neumeyer, *ibid.*, p. 318.



ベルリンの建築組合住宅, (1907)



(1911)

工場の郊外移転に付随して生じ、労働者の福利厚生には大きく貢献した労働者コロニーだったが、ベルリンの労働者意識を鑑みたハインリヒ・アルブレヒトは、コロニー建設は労働者が大都市からではなく地方から召集される場合に適しているとして、ベルリンの企業家にはむしろ建設協同組合の活動支援を勧める。⁶⁷実際ベルリンでは「ズィーメンス・シュタット」のように建設協同組合と企業家との共同事業という形が取られるようになり、労働者コロニーはむしろベルリン以外の中・小都市で成功に至っている。

3-4. イギリスの前例

録に恵まれた独立性の高い立地に労働者のための生活共同体を造るというコロニー建設の理念は、産業革命の先進国であるイギリスの例を模範としていた。イギリスではロバート・オーウェンに代表される 19 世紀前半の社会主義的ユートピア建設の他に、モデル・ヴィレッジと呼ばれる労働者団地が羊毛工業地帯に誕生していた。ソルテア、コブレイ、アクロイドン等の丘陵地帯にできた初期の労働者コロニーである。これらのモデル・ヴィレッジは背中合わせ式住宅が中心で、独立式住宅という理想の実現には遠かったものの、労働者住宅への新しい様式の導入としては意欲的な試みであった。



モデル・ヴィレッジのデザイン (1888)



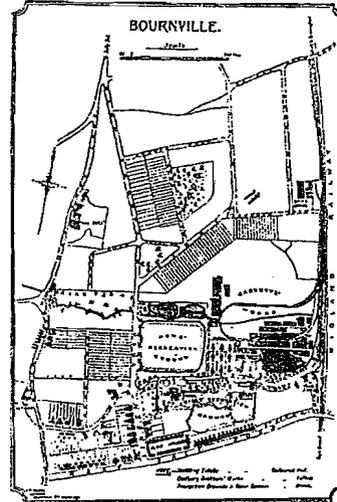
ソルテアの労働者住宅 (1851)

オーウェン主義が廃れた後の 19 世紀末からは、博愛主義的工場主と呼ばれる企業経営者達が労働者の住環境改善による社会改革を継承する。チョコレート工場主ジョージ・キャドバリー (George Cadbury) が 1887 年バーミンガム郊外に建設したボーンヴィル

⁶⁷ ベルリン機械製作株式会社は 1906 年に、ボルズィヒ社は 1919 年に建設協同組合を設立して事業を継続している。



コブレイ, 前庭のある背中合わせ式住宅(1853)



ボーンヴィルの見取り図 (1898)
集会場, 養老院, 運動場, 公園等
が見える。



ボーンヴィルの2世帯住宅 (1900),
1981年

(Bournville) と、石鹼工場主ウイリアム・ヘスケス・リヴァー (W. H. Lever) がリヴァー
プールの対岸に建設した 1889 年のポート・サンライト (Port Sunlight) は、模範的なガー
デン・ヴィレッジとしてドイツの労働者コロニー建設に大きな影響を与えた。ガーデン・
ヴィレッジとは、工業の成熟に伴い工場が都市の過密地区から分散したことにより誕生し
た都市郊外の労働者コロニーである。

労働力の安定供給がモデル・ヴィレッジ及びガーデン・ヴィレッジ建設の第一の目的で
はあったが、特にガーデン・ヴィレッジの場合、「労働者の社会的状態を改善する」という
理想主義的な理念が極めて強く前景化していたこともまた明らかである。この時期の工場
経営者達は、労働者の住環境が彼らの芸術観と世界観に与える影響を明確に意識していた。
「世紀末の一つの事件」⁶⁸と言われたボーンヴィルを建設したキャドバリーは、「人間を取り
巻く状況を改善するための近道は、その理想像を高めることである。しかしその住居が
スラムのようで、唯一の娯楽が酒場通いである時、どうして人は理想像を高められようか」
⁶⁹という言葉を残している。また、ポート・サンライトの経営者リヴァーも、「健康のため
に最適な環境の確保を目的に、適切な住宅条件のもとで都市生活を営むことこそが、人類
の幸福にとってとりわけ重要である」と語っている。⁷⁰

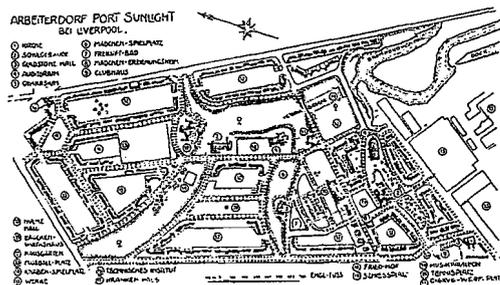
⁶⁸ 月尾嘉男・北原理雄『実現されたユートピア』鹿島出版会, 1980. p. 163.

⁶⁹ Howaldt, Gabriele, Die Arbeitersiedlung Gmindersdorf in Reutlingen, in : Ekkehart Mai (hrsg.),
ibid., p. 334.

⁷⁰ 月尾嘉男・北原理雄, 同上, p. 163.



ポート・サンライトの街路（上）と2世帯住宅（下）（1900, 1981年）



ポート・サンライトの見取り図（1911）
プール、サッカー場、児童公園、音楽堂等がある。

ボーンヴィルもポート・サンライトも、広い敷地に庭付き住宅と商店、教会、病院、学校といった公共施設を持つ恵まれた労働者コロニーとなった。住宅建築の伝統を生かしながら「20世紀の要求に答える」という近代主義的発想のもとに建てられたこれらイギリスの住宅を、プロイセン政府より派遣されたムテーズィウスは「真に実用的で、理性的で、健康である」⁷¹と評している。これらは一棟の世帯数から言えば2世帯から6世帯住宅で、庭付き一戸建て住宅という理想の実現には至らなかったものの、採光や換気等の衛生面に配慮した点において当時としては格段に水準の高いものだった。特にポート・サンライトは、「イギリス人の内側に根付いた一つのユートピア像が、現実の環境として近似値を実現

⁷¹ Schollmeier, *ibid.*, p. 49.

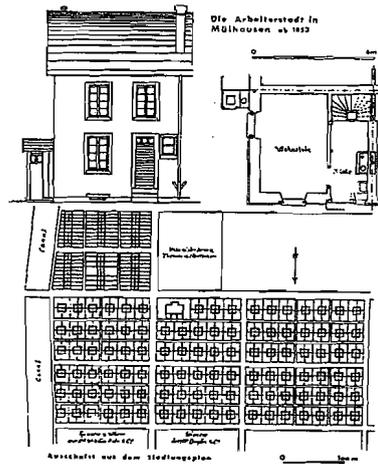
していた」⁷²とされている。

勿論これら博愛主義的共同体の中にも管理的な体質が存在したことは否めない。ある工業技師はレヴァーに対し、「独立心の旺盛な者は誰でもポート・サンライトの空気を長く吸っていることはできません」と書き送っている。⁷³

しかし“繁栄の共有”を富の蓄積に匹敵する課題と考え、また労働者階級の住環境にも美的な性格を付与する必要があるという工場経営者達の信念は、これら労働者コロニーの建設にとって非常に重要な意味を持っていた。ドイツの労働者コロニーに及んだその影響も、建築様式に関するよりもむしろ思想的な面において大きかったと言えるだろう。その後キャドバリーがボンヴィルを「ボンヴィル・ヴィレッジ・トラスト」という形で住民の共同経営に任せ、リヴァーは1909年、リヴァプール大学の建築学部にて都市デザイン学科を設置するための寄付を行うなど、彼等の信念はさらなる社会改革のプログラムへと発展してゆく。また、1902年にエベネザー・ハワードの田園都市レッチワースの建設が始まった時、共同出資者となったのもキャドバリーとリヴァーの二人だった。



田園都市・レッチワース



ミュールハウゼン、4世帯住宅団地の見取り図（1853）

3-5. ドイツの代表的労働者コロニー

3-5-1. ミュールハウゼン

ドイツの労働者住宅に最初の影響を与えたのは、当時フランス領だったアルザスのミュールハウゼンに建てられた紡績工場住宅（シテ・ウヴリエール *cité ouvrière*）である。1853年に建設されたこの集落のモデルは、1851年ロンドンの万国博に展示された労働者住宅であり、モデル・ヴィレッジの一つであるソルテアとの類似点も顕著だと言われている。⁷⁴ミュールハウゼンも最初背中合わせ式住宅を建設していたが、後に後期のモデル・ヴィレ

⁷² 月尾嘉男・北原理雄，同上，p. 169.

⁷³ 同上，p. 169.

⁷⁴ Schollmeier, *ibid.*, p. 45.

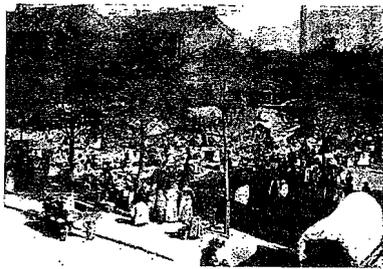
ジに倣って4世帯住宅を採用している。この4世帯住宅は衛生面でまだ問題を残してはいたものの、背中合わせ式住宅より進化したものとして当時は肯定的に評価された。またミュールハウゼンにおいて長期ローンの支払いによる住宅購入の道が開かれたことは、独立住宅の所有へ至る試みと見ることができよう。この4世帯住宅の様式が、1890年頃から急増したルール地方の労働者住宅のモデルとなった。

3-5-2. クルップ・コロニー

ドイツで最も有名な労働者コロニーと言えば、軍需産業で知られるクルップ商会のクルップ・コロニーである。それはまた既に1860年代の後半に建設が始められたドイツで最も歴史の古いものでもある。クルップ社の住宅及びその他の厚生施設の建設は、労働者とその家族を包摂する「クルップ帝国」の隆盛にとって非常に重要な事業であった。

クルップ社の福利事業は1850年代に始まった。自らも勤勉な工場勤労者であったという「大砲王」アルフレート・クルップ (Alfred Krupp, 1812-1887) は、国による法的整備に先立つこと約30年の1853年に社内労災保険や年金制度を施行している。そして鉄鋼産業の隆盛に伴って従業員が急増した60年代後半からは、労働者住宅が企業の繁栄のために必要不可欠な厚生設備となっていった。

“クルップの町”エッセンの人口は1850年には約9,000であったが、職を求める移住者の流入を受けて1871年には52,000へと急増した。クルップ社の従業員数も1864年の6,900から1871年には10,400に増加し、住宅不足に対する労働者の不満が労働運動の高まりに拍車を駆けていた。1865年、まず独身労働者、高齢者、退職者のために200世帯用の住宅が建設される。それは木造バラックのような簡単な建物だったが、その後半世紀に亘って行われるクルップ・コロニー建設の始まりであった。



シェーダーホーフの広場 (1900)



クローネンベルク (1906)

1870年代に入り、普仏戦争後の4年間で従業員数が12,000に達する頃、ヴェストエントホーフ、ノルトホーフ、シェーダーホーフ、クローネンベルクといった住宅地が相次いで建設され、社宅は順次快適さを増していった。特に後者2つの団地は、緑の多い中央公園と各住棟に設置された庭によって恵まれた住環境を持ち、コロニーとしての計画的な全体像が実現されていた。「緑の前庭と豊かな並木に縁取られた街路はそれまでのドイツのいかなる労働者街にも見られぬものだった」⁷⁵とされている。

⁷⁵ 月尾嘉男・北原理雄，同上，p. 190.

クルップ・コロニーには、教会、学校、病院、商店等の施設も揃っており、それらの厚生施設はクルップ社の先駆的な企業精神を反映していた。しかしアルフレート・クルップによる住宅建設は、あくまでも最低限の住宅を労働者と企業の両者にとって最も低廉な価格で提供するための企てであり、居住者の美的な欲求を満足させるためのものではない。労働者住宅に芸術性を付与するためには、世代の交代を待たなければならなかった。

1887年に当主となったフリードリヒ・アルフレート・クルップ (Friedrich Alfred Krupp, 1854-1902) は、新時代の空気を呼吸していた。イギリスのガーデン・ヴィレッジによる影響を受けた彼は、安価で簡素なだけでなく美的で芸術性の高い住環境作りを目指した。そして「老人には住み心地を、若者には美を」⁷⁶というモットーのもと、視覚的効果を意識した広い住宅を建設し、スポーツや芸術鑑賞のための施設、図書館等を充実させる。1893年から1907年にかけて、アルフレッツホーフ、フレデリクスホーフ、フリードリヒスホーフ等、アパート形式を脱して半独立式住宅または4世帯住宅を中心とするコロニーが完成する。それぞれ放射状の街路、並木と家々の庭など、田園的雰囲気を持つ落ち着いた住宅地だった。この時代のコロニーの中で、絵画的効果への志向がひとときわ頼著なのがアルテンホーフである。主に退職者、傷病者、寡婦のためのこのコロニーは、「恩給を受けながら自宅で老後を過ごす機会を退職者に提供する」⁷⁷という父親の遺志をフリードリヒ・アルフレートが独自の審美観で実現させたものだった。彼は建設に先立ち、「(退職者に)美しい健康な敷地でこじんまりした庭付きの小さな我が家を作ってやり、一生自分の好きなように利用して楽しい生活の一日を送らせたい」⁷⁸と語っている。アルテンホーフは500の住戸に2つの礼拝堂、森と公園を持ち、直線街路は一本もなく、ロマン主義的な審美観によって作られていた。フリードリヒ・アルフレート自身よくここに立ち寄り、時を過ごしたという。

1890年代のクルップ社は、労働者の生活に娯楽の喜びと芸術的な潤いを与えることが上質な労働力の円滑な再生産にとって重要であるという認識に立っていた。フリードリヒ・アルフレートの時代までに完成した住宅は28,000を数え、第一次大戦前に8万の人間を抱えた「クルップ帝国」は、その労働者達が「クルップの住宅に住み、クルップ社の赤ん坊はクルップの医者によって取り上げられ、クルップ社員の子供達はクルップの図書館から本を借り、クルップの教会で結婚式を挙げ、クルップの墓地に葬られた」⁷⁹と言われるほどの大家族的共同体となる。

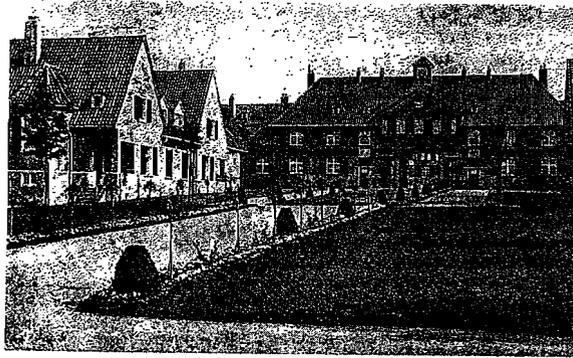
さらにフリードリヒ・アルフレートの死後、クルップ・コロニーの頂点をなす住宅地が建設される。夫の死後も福祉事業に力を入れた妻のマルガレーテが資金と所有地を提供してエッセン市と協力し、クルップ社の社員及びエッセン市民のために建設したマルガレーテンヘーエである。エッセン市の中心から4キロの、周囲を森で囲まれた敷地に準備され

⁷⁶ 月尾嘉男・北原理雄，同上，p. 191.

⁷⁷ 諸田寶『クルップ』東洋経済新報社，1980. p. 200.

⁷⁸ Berdrow, Wilhelm, Alfred Krupp und sein Geschlecht, Berlin, 1937, p. 212.

⁷⁹ 月尾嘉男・北原理雄，同上，p. 193.



アルフレッツホーフ (1894)

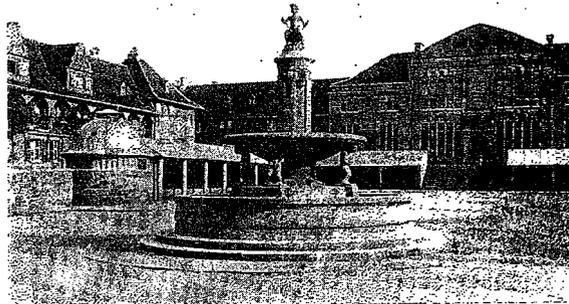


アルテンホーフ (1906)



アルテンホーフの寡婦用住棟 (1920)

た約 2,500 戸の住宅地はクルップ・コロニーの中で最も絵画的な効果を持ち、伝統的な建築美を意識して作られていた。破風や張り出し窓の付いたその様式はドイツの典型的な村落のイメージを投影したものだだったが、擬中世的・ロマン主義的で、真に労働者向けのデザインとは言い難かった。クルップ・コロニーの建設が労働者の生活環境改善に大きく寄与しながらも、建築的に見れば労働者住宅として真の需要に適った機能性と美を求めるといふコンセプトからはずれていると言われるのは、⁸⁰伝統的な中産階級の理想像に向かうその審美的傾向に因っている。しかし社員の福利厚生面に果たしたコロニーの貢献は大きく、熟練工の長期的確保と製鋼法の秘密の保持という点においても、クルップ・コロニーの企業経営的な成功は大きかったと言えよう。



マルガレーテンヘーエの広場 (1909)

⁸⁰ Howaldt, *ibid.*, p. 352.



マルガレーテンヘーエの住宅 (1909)

3-5-3. グミンダースドルフ

ドイツの伝統的な住宅様式を踏襲しながらもより機能主義的で、労働者のアイデンティティ育成という目的に沿ったと言われているのが、ヴェルテンベルク州ロイトリンゲンの繊維工場ウルリヒ・グミンダー社によるグミンダースドルフ (Gmindersdorf) である。

19世紀後半以来、労働者の確保とその住宅問題の解決は企業にとって共通の課題であったが、ウルリヒ・グミンダー社の当主達は地方名士としての自負からもキリスト教的な社会政策理念に関心を持っていた。イギリス滞在の経験から労働者の住宅環境についての理念を持つに至ったエミール・グミンダー (Emil Gminder) は、「帝国自由都市ロイトリンゲンは労働者のために劣悪でかつ高価な住宅しか提供してこなかった」⁸¹としてクルップ社の例を引き、ロイトリンゲン市と労働者コロニー建設の交渉を始める。グミンダーの理想によると、廉価で美的かつ健康な住宅地はコロニーでもズィードルングでもなく、独立した村 (Dorf) となるべきであった。1903年、シュトゥットガルトの工科大学で都市計画を教えていたテオドール・フィッシャー (Theodor Fischer, 1862-1938) が建築デザインを担当し、48の家屋と商店、託児所、小学校、養老院等から成る一つの小規模な村の建設が始まる。

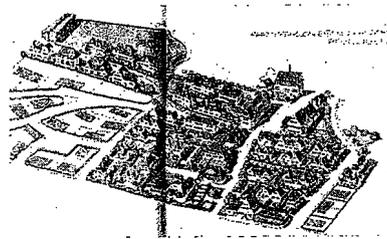
「モダンのハーフタイム」とも呼ばれる第一次大戦前の10年間は、実用派が次第に芸術派の優位に立っていく時代でもあった。1904年、芸術批評家グルリットは都市建築に関し、「目的に適ったものこそが真に芸術的かつ美的であり、真に美的なものこそが目的に適っている」⁸²というモットーを発表している。フィッシャー自身も「建築家は衛生学者や社会政策者の示す可能性を、最も廉価に、実用的に、また慎ましい条件下でも美しく実現させる術を心得ていなければならない」⁸³と考えていた。グミンダースドルフもイギリスのガーデン・ヴィレッジを模範としており、住戸は大きくても4世帯住宅のコテージ様式だった。質素で美しい建築を心がけたフィッシャーは、木組み、切り妻屋根、差し掛け屋根といったドイツの伝統的な建築様式と都市型スタイルを折衷し、画一性を避けるため18ものモデルを作る。伝統的なスタイルへの回帰は「フォルムと機能、美と目的、実用と芸術の調和」という彼の理念と相容れないものではなかった。グミンダースドルフの住民の

⁸¹ *ibid.*, p. 332.

⁸² Schollmeier, *ibid.*, p. 51.

⁸³ Howaldt, *ibid.*, p. 341.

多くは農村出身者であったし、労働者住宅が中産階級のための建築の亜流となることを避けるためにも、農村的建築様式が住民の現実に合致したものだ。また各ブロック内のレイアウトは住民の交流を容易にするよう考案されていた。



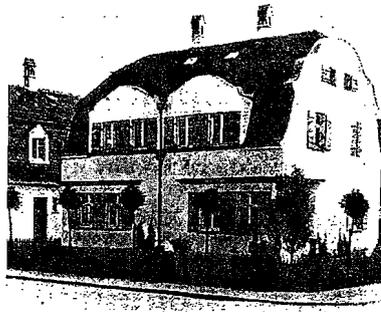
グミンダースドルフの見取り図
(1908)



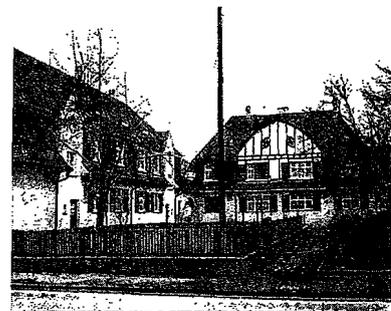
グミンダースドルフの2世帯住宅
(1903), 1973年

クルップ・コロニーとグミンダースドルフは両者ともイギリスの労働者住宅を模範とし、労働者に実用的で健康的な住宅を供給しつつ職場以外での生活の満足感を与えるという目標においても共通している。外見的にもマルガレーテンヘーエとグミンダースドルフの差違はさほど大きくはない。しかし建築を世界観の表出と捉えていたフィッシャーにとって、コロニー建設は労働者の生活の安定と労働力の再生産を図るという目的の枠を越え、「互いに心情を共有する住民組織」創設⁸⁴の試みだった。グミンダースドルフは企業全体の労働者に占めるコロニー住人の割合の低さと、労働者の再生産にさほど成功しなかったという点において、クルップ・コロニーと比較するとその経営的効率は低かった。しかし人間の新たな共生理念の体現を目指したものとして、より進歩的に「人間生活の新たな理想の追求」に踏み込んだ試みであったと言われている。⁸⁵

社会改革者のヘルマン・シュミットは1910年、「毎年多くの建築家や社会政策者がイギリスへ赴いて模範的なコロニーを見学し、賞賛するが、規模という点を除いてはイギリスの例に決して引けを取らない労働者コロニーがドイツにも既に存在するのである。第一に挙げるべきは、ヴェルテンベルク州の我らが小さきグミンダースドルフである。」という言葉を残している。⁸⁶



グミンダースドルフの2世帯住宅
(1905)



グミンダースドルフの住宅 (1907)

⁸⁴ *ibid.*, p. 354.

⁸⁵ *ibid.*, p. 353.

⁸⁶ *ibid.*, p. 347f.

3-6. コロニーと生活改革運動

テオドール・フィッシャーは擬古典的建築から出発しながら 1900 年頃に新しい様式の模索を始めた建築家である。彼の事務所にはブルーノ・タウトやシュトゥットガルト中央駅の設計者として知られるパウル・ボナーツがおり、共にグミンダースドルフのプロジェクトで働いていた。またフィッシャーはリヒャルト・リーマーシュミットが中心となって手がけた田園都市ヘレラウの建設にも参加しており、これらの若手を始めエーリヒ・メンデルスゾーンやフーゴ・ヘーリング、ヴァルター・グローピウスといった面々にも影響を与えたと言われ、ペーター・ベーレンスと並んでモダニズム建築史上の功績は大きい。また生活改革運動にとっても、フィッシャーおよびグミンダースドルフ建設は、相互に影響を与え合う関係にあった。

1900 年頃、社会改革者や社会主義者達により「家庭生活の理想」が語られ始めていた。「幸福な人間存在の基盤は自宅と庭にある」とする民俗学者、W・H・リール (Wilhelm Heinrich von Riehl) の著書『家庭 (Die Familie)』がこの頃教科書版として再版され、広い読者層を得る。⁸⁷リールは既に 19 世紀後半から田園礼讃によって知られた作家であった。⁸⁸ イギリスから帰国して「田園都市協会」に参加したムテーズィウスも 1907 年、「唯一の人間的な住まいは独立家屋であり、虚栄からの脱皮、率直な心情、正直さ、深みのある精神生活は、独立家屋との相関関係にある」と述べている。⁸⁹また郷土保護運動や芸術教育運動等多くの生活改革運動に関与した反ユダヤ主義的イデオログ、パウル・シュルツェ-ナウムブルク⁹⁰は、1903 年に理想的な集落の建築について述べた『村落とコロニー (Dörfer und Kolonien)』を著している。⁹¹1907 年にはハウードの『明日の田園都市』がドイツで翻訳出版され、入植運動の高まりもあって庭付き家屋を中心とする住宅地および共同体の建設には大きな関心が寄せられていた。しかし 19 世紀ドイツの市民用住宅建築に対する不満は大きかった。ムテーズィウスは、イギリスのコロニー建築が「家庭的、小市民的、農村風の建築を経由して単純かつ自然で理性的な様式へ至る」ことに成功したのと較べ、「ドイツの歴史主義は、騎士時代の理想か大邸宅のイミテーション」に過ぎないと述べている。⁹²真に実用的かつ理性的で、健康的な住宅様式を確立する必要があった。

⁸⁷ Riehl, Wilhelm Heinrich von, *Die Familie*, 1855/1896, Stuttgart, in: Howaldt, *ibid.*, p. 354.

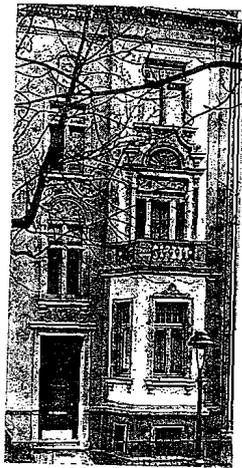
⁸⁸ Schollmeier, *ibid.*, p. 27.

⁸⁹ Howaldt, *ibid.*, p. 354.

⁹⁰ 副島美由紀「近代《病理》のイコノグラフィー：ナチスによる近代美術の(病理化)現象」, 小樽商科大学「人文研究」第 91 輯, 1996, P. 189ff. 同「モダニズムが夢見たユートピア：ドイツ田園都市建設の歴史 (1) —世紀転換期の生活改革運動」, 小樽商科大学「人文研究」第 96 輯, 1998, p. 201.

⁹¹ Schulze-Naumburg, Paul, *Dörfer und Kolonien*, Kulturarbeiten Bd. III, Hrsg. Kunstwart, München, 1903.

⁹² Schollmeier, *ibid.*, p. 49.



中産階級のための住宅
(1899)



「村落とコロニー」に載った18世紀の住宅
(上)とフィッシャーのデザインによるグミン
ダースドルフの住宅(下)(1903)

フィッシャーはシュルツェ-ナウムブルクを通じてムテズィウスがもたらしたイギリス建築に関する情報を得ており、また『村落とコロニー』の中でシュルツェ-ナウムブルクが「健康的農村建築」と賞賛した18世紀の様式を、グミンダースドルフの住宅デザインに取り入れている。グミンダースドルフは伝統的であると同時に進歩的でもある「未来的伝統」創造の例として郷土芸術運動が称揚する対象となり、フィッシャーは郷土芸術運動の推進者と称されるに至る。またグミンダースドルフの様式は田園都市協会会長のキャンプマイアーにも賞賛され、20世紀の郷土芸術的建築モデルとして地方に広がっていった。⁹³そしてこの郷土芸術運動は徐々に“血と大地”のモットーを掲げる民族主義的なイデオロギー色を強めていくのである。

一方労働者コロニー自体は、労働契約に左右される賃貸契約やその家父長的体質に対する批判を受け、企業による経営という性格を変えつつあった。グミンダースドルフの5年後に建設が始まった「田園都市ヘレラウ」の場合、工場用地以外の土地を所有していたのは「有限会社ヘレラウ田園都市協会」と「ヘレラウ住宅建設組合」の二つの公益団体であり、住民の大半も一般の市民であった。企業とコロニーの関係は依存から共存へと性格を変えていく。

一方芸術にとってそのような共存は重要性を増していった。1907年、芸術関係者の集まりから「ドイツ工作連盟 Deutscher Werkbund」が設立される。それは近代化による芸術と産業の融合を目指す12名の芸術家と12の企業から成る同盟で、ペーター・ベーレンスやテオドル・フィッシャー、ファン・デ・ヴェルデといった気鋭の建築家が名を連ねていた。ヘレラウのプロジェクトに参加した建築家達は皆「ドイツ工作連盟」のメンバーであ

⁹³ Howaldt, *ibid.*, p. 346 ; Schollmeier, *ibid.*, p. 27.

った。ヘルマン・ムテズィウス、リヒャルト・リーマーシュミット、ハインリヒ・テッセノウ、そしてテオドール・フィッシャーである。建築に「与えられた課題の内的な要求を究めること」を求めたムテズィウスや、労働者住宅の住民に期待される性質として「正直、冷静、明朗、誠実、質素、自尊心」等々を挙げていた⁹⁴リーマーシュミットらの意気込みは高かった。リトミックの教育施設である「ダルクローズ学校」の祝祭劇場の建設と共同体による祝祭劇開催を含め、ヘレラウ建設の事業は「社会文化的な実験」⁹⁵と見なされるようになる。

実際にはヘレラウ建設の5年後に勃発した第一次世界大戦が田園都市の状況を大きく変えてしまうのだが、住宅改革運動はその後「借家人保護法」の整備や「田園郊外」、「ジードルング」の建設等、取り組みが多様化していくことになる。

4. E・ハワードに先んじたドイツの田園都市構想

ドイツの田園都市建設運動は前述の通りイギリスにおける田園都市建設に触発されるかたちで約100年前に始まったものである。田園都市の理念を広める媒体となったのは1898年に出版されたエベネザー・ハワードの著書『明日の田園都市』であり、彼の提唱した田園都市の建築プランは日本を含む諸外国にも紹介されて関心を呼んだわけだが、実際には既にハワードの著書出版に先立つ1896年に、ドイツの社会改革者がハワード構想によく似た都市改革プランを起草し、その名も「田園都市」という副題を持つ著作として発表を行っていた。この事実はドイツ以外の国々では殆ど知られていない。『イデオロギーとユートピア』を著したカール・マンハイムはユートピアの形式はそれが現れた場の歴史的・社会的位置と相関関係を持つと述べたが、⁹⁶ドイツの社会改革者による理想の都市構想はドイツという特有の土壌に生まれたユートピアの範型として着目すれば、その社会改革構想のドイツ的性格について興味深い視点が得られる。かつ、それがヨーロッパにおけるユートピア思想の系譜上に占める独特の布置も確認することができる。よって以下においては、ハワードに先んじて田園都市モデルを考案していたドイツの社会改革者の仕事とそのユートピア思想の特徴を紹介したい。

4-1. 社会改革者テオドール・フリツチュと土地改革論

社会改革者のテオドール・フリツチュ(Theodor Fritsch)は、1853年ザクセンの農家に生まれた水車技師であった。フリツチュが青年期を迎えた1870年頃から、ドイツでは産業革命による社会の変貌やドイツ帝国の成立を背景に社会改革の風潮が高まっていたが、彼も経済問題や生活改革に強い関心を抱くようになる。そして業界紙「ドイツの製粉業」の発行を手がけたことをきっかけに徐々に出版事業に熱中し、社会改革に関するパンフレットの

⁹⁴ Howaldt, *ibid.*, p. 354.

⁹⁵ Sarfert, *ibid.*, p. 22.

⁹⁶ カール・マンハイム『イデオロギーとユートピア』鈴木二郎訳、未来社、1968. p.214f.

発行や何冊かの自費出版を行った後、1901年にライプツィヒで「ハンマー出版社 (Hammerverlag)」を興す。そして同年から「ドイツ精神のためのハンマー新聞 (Hammer-Blätter für deutschen Sinn)」という定期刊行物の発行を開始する。「ハンマー新聞」はその発行理念として“生活刷新のための提案”という性格を前面に打ち出しており、菜食主義、禁酒運動、中流階級と手工業階級の地位の向上運動、土地改革、農業振興といった、当時ドイツで様々に興っていた生活改革運動のプロパガンダを多く紙面に掲げていた。

97

水車技師から社会改革者へと変貌を遂げていく過程で、フリッチュは社会的弱者、いわゆる“持たざる者”の暮らしを困難にする要因として、土地の私有と大資本に着目するようになる。1894年『二つの根本害悪 — 土地成金と証券取引』⁹⁸を著して土地改革に関する彼の最初の提案を行うが、ちょうど1890年代は1840年代に始まったドイツの住宅改革運動が土地改革という根本的な視座を獲得して国内外での植民やジードルング建設運動へと拡大していった時代であった。アメリカの土地改革論者、ヘンリー・ジョージに影響を受けたミヒャエル・フリーアシャイム (Michael Flürscheim, 1843-91)らの急進的グループによる「ドイツ土地所有改革同盟 (Deutscher Bund für Bodenbesitzreform)」(1888年設立)や、“土地改革の父”と呼ばれたアドルフ・ダマシュケによる穏健な「ドイツ土地改革同盟 (Bund deutscher Bodenreformer)」(1898年設立)等、この時期に結成された土地改革グループや住宅建築共同組合は数多い。⁹⁹ テオドール・ヘルツカは1889年に資本主義と社会主義を折衷した植民の理想郷、『フライラント—ある社会的な未来像』¹⁰⁰を発表し、“フライラント”という言葉は当時出版業界における流行語のようになったと言われているし、¹⁰¹ 入植の理論家として知られるフランツ・オッペンハイマーも1896年に組合を設立してドイツ的村落共同体の復活を目指すジードルング運動を開始している。

もとより自然法的発想としての土地の公有化論はプラトンの『国家』以来常に存在していた。19世紀末のドイツの土地改革論者達が共通して訴えたのも土地の公有化、あるいは土地を公共経済的財産として捉える地価の導入である。フリッチュも同様に土地公有化論者であったが、他の理論家達が地価という問題に焦点を絞ったり、あるいはヘルツカのようにアフリカへの植民を想定して共同体経営の理想像を提示したのに対し、フリッチュが行ったのは土地改革を伴う都市建設の提案だった。1895年、彼はそれを『未来の都市—田園都市』¹⁰²という著書にまとめ、翌年自費出版する。ハウードの田園都市構想が発表される2年前のことである。

97 Phelps, Reginald H., Theodor Fritsch und der Antisemitismus. In: Deutsche Rundschau, Nr.87, 1961, p.443.

98 Fritsch, Theodor, Zwei Grundübel: Boden-Wucher und Börse. Leipzig, 1894.

99 Krabbe, *ibid.*, p.32f.

100 Hertzka, Theodor, Freiland : ein sociales Zukunftsbild, Dresden, 1889.

101 Baumgartner, *ibid.*, p.35.

102 Fritsch, Theodor, Die Stadt der Zukunft. Leipzig, 1896.

4-2. “未来都市”の様相

ドイツにおける土地改革運動の目的は急激な工業化がもたらした都市の劣悪な住環境の改善であり、そこには新ロマン派的な田園回帰に傾く契機も多くあったが、フリッツュの改革論は社会の産業化や近代化を全面的に否定して文化悲観主義的になるのではなく、ドイツの都市機能そのものが変貌の時期を迎えているという認識から始まっていた。中世以来のドイツの都市が防衛ということを目的とし、その目的に適った城壁等の構造を持っていたのに対し、今や開放的な交通網を持った交易および産業都市を建設すべき時であるという認識である。都市はまず中世的構造の制約から解放されねばならない。¹⁰³ しかし古い構造に新たな機能を接ぎ木しようとしても不合理および不経済であり、かつ様々な弊害を生む。よって彼が提案したのは単なる住宅改善や都市の再開発ではなく、近代的な構造を持ちほぼ200年先の未来を見越してデザインされるような、新たな都市の建設である。

フリッツュの構想による“未来都市”の形状は円形であり、同心円を描く7層の環状ゾーンに分かれている。ゾーニングは建築物の機能ごとに行われ、まず円の中心部は市庁舎や博物館といった公共建築物が占める。そして最も外側には農地等の緑地帯が広がる。これらの環状ゾーンの区分を示すのが図①である。

〔ゾーンの区分〕

1. モニュメンタルな公共建築物
2. 公的な性格を持つ建築
3. 高級住宅地
4. 住宅地あるいは商業用地
5. 労働者住宅地あるいは中小企業地域
6. 工業・倉庫地帯
7. 農業・牧畜・ガーデニング用地



Fig. 1: Zonen-Einteilung.

① 7層のゾーニング

各ゾーンは環状道路または緑地帯によって分離されており、郊外から中心部へとゾーン縦断鉄道が走っているので中心部は都市のどの部分からもアクセス可能である。農業ゾーンの外側には環状鉄道もあり、鉄道と近隣の河川へと通じる運河とが都市と外界を結ぶ交通手段となっている。

この都市構想の特徴は都市が内側から外側へではなく、外側から内側に向かって成長するよう想定されていることだ。図①で見る半径 a-c の線上から都市の建設が始まり、しかも a 地点から中心部の c 地点に向かって建設が進んでいくことになっている。都市の建設はまず運河あるいは鉄道の建設に適した場所を選んで第6ゾーンから開始される。偏西風を考慮して工場排煙の影響を受けない方向に第5ゾーンを置き、労働者用の住宅地が整備される。その後一般の住宅や商店街、公共建築ゾーンへと徐々に市街地が展開していくのである。図②が示すように、第1ゾーンまでを具えた最初の市街地は楔形の形状をしている。人口が増加するにつれてそれが扇型に広がり、徐々に半円、そして円形へと発展して

¹⁰³ Fritsch, Theodor, *ibid.*, p.9.

くのである。

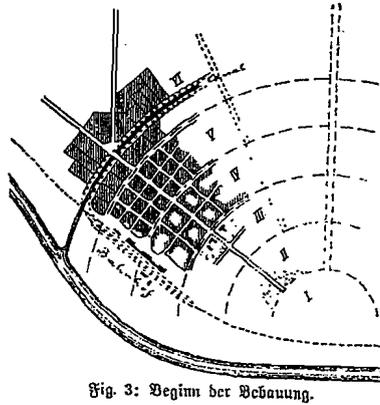


Fig. 3: Beginn der Bebauung.

②都市建設の初期段階

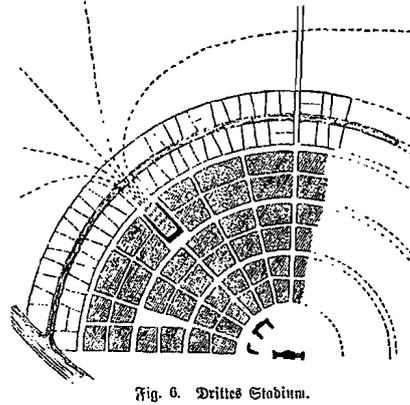


Fig. 6: Drittes Stadium.

③発展段階

このような都市建設の過程で最も重要なことは、鉄道、運河、道路の建設、電力、ガス、上下水道の施設が最初から長期的計画によってシステマティックに行われることである。都市建設の際の指針は、美的、効率的、機能的であることであり、¹⁰⁴ 効率的な都市構造として二重構造を持った道路が紹介されている。つまり地上の道路と平行して地下道を建設し、そこに電気、ガス、水道等の供給網を配置すると同時に物資輸送網としても利用するという案である。

この未来都市の理想的な規模と人口についての言及はないが、都市が半円形を越えて円形に成長するまでの期間をフリッチュは150年から200年と想定していることから、ハワードの小規模都市計画とは違って少なくとも中規模の都市計画であることが推測される。その際ゾーンの区分と形態は必ずしも厳格に構想通りである必要はなく、ゾーン内の建築物には多様性が許容されるべきであるし、多角形の都市に発展する可能性もある。また都市が半円から円形へと展開していく段階で各ゾーンの幅が人口増加に応じて拡大し、最終的には図⑤が示すように全体が螺旋を描きながら成長していくだろう、とフリッチュは述べている。

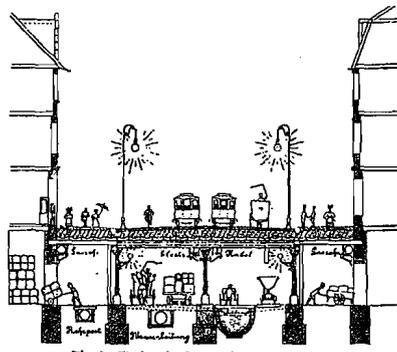


Fig. 8: Straße mit oberer und unterer Fahrbahn.

④二重構造の街路

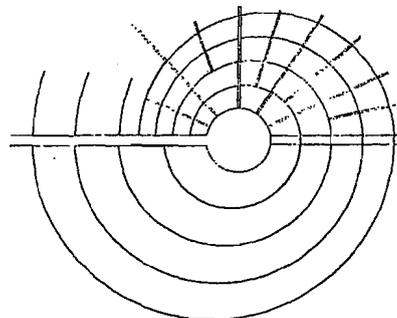
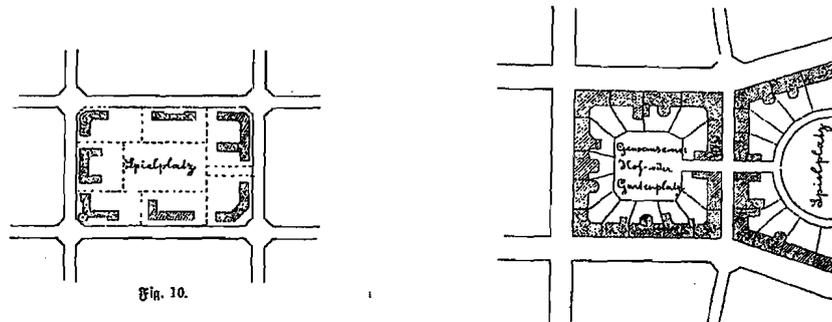


Fig. 2: Spiralförmig sich erweiternde Zonen.

⑤螺旋状に拡大するゾーン

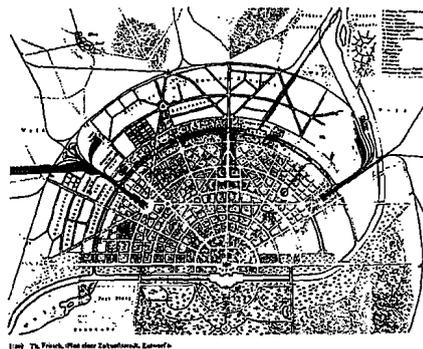
¹⁰⁴ ibid., p.8.

機能性や計画性を重視する一方でフリッチュが強調しているのは都市の有機的な発展ということである。都市は交易と政治の中心であると同時に芸術・文化活動の中心でもあり、円の中央部に設けられたそのための機能と空間を十分に保持しながら発展成長していかなければならない。市役所、美術館、オペラハウス、大学、図書館、聖堂等の建物を配したこの中心部には都市のオアシスとして十分な緑地と公園が必要であり、高級住宅地における家屋は一戸建てであることが理想とされる。住民の健康ということを特に重視する未来の都市では、快適な住空間を保証するために一般の住宅ゾーンでも各ブロックに中庭や遊園地が配置されており、さらに外側の工場ゾーンは緑地分離帯によって住宅地と隔てられていなければならない。この住宅を巡る緑地空間の多さによって、フリッチュはこの未来の都市を「田園都市 (Gartenstadt)」と呼んでいるのである。¹⁰⁵



⑥住宅ブロック内の庭と公園

フリッチュの未来都市とハウードの田園都市構想には多くの類似点がある。ハウードが1898年に発表した理想の田園都市もやはり同心円設計であり、街は環状道路によって5層のゾーンに分かれ、その外側を環状鉄道が走っている。市の中心部の公園と公共建築物、住宅地の外側の工場地帯、それを囲む農業地帯等々は、フリッチュの未来都市とよく似た構図を示し、その6分の1を示すダイアグラム図⑧を見ただけでも両者の類似点は顕著である。



⑦半円段階の田園都市

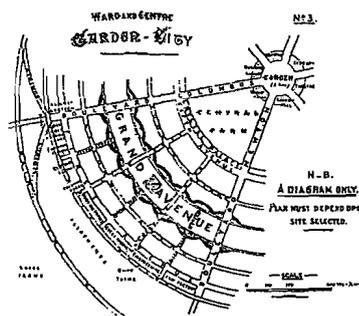


Abb. 11. Garden City Stadtplan. Zur Schule führt die Fochel Street; deutsche Pädagogik zwischen Wissenschaft, Technik und Literatur.

⑧ハウードの田園都市、6/1の図

¹⁰⁵ Fritsch, *ibid.*, p.21.

また、土地の公有化という点においてもこの二つの構想は共通している。もとより私有財産である土地の高騰こそが住環境悪化の元凶だと考えていたフリッチュは、土地の公有化こそ都市の健全な発展の前提条件であると考えていた。フリッチュによると、土地所有者による個人的利害と私有財産を巡る近視眼的な政策によって、都市はこれまで無秩序・無計画に拡大してきた。土地は自治体から住民への長期貸与というかたちで使用されるべきであり、この自治体による土地の管理ということがなければ健全な都市計画は可能とはならない。フリッチュの提案によると、都市はまず土地を所有して場所ごとの地価と使用目的に見合った賃貸料を設定する。賃貸契約は 60,90,120 年というスパンで行われ、住民は毎年賃貸料を都市に納入する。地価の漸次的上昇による安定した賃貸料収入により、都市は自治体としての財源を確保することができ、地方税を徴収することなく住民に充実した公共福祉サービスを提供することができる。しかも公的な受託によって建設される住宅は衛生的にも審美的にも優れており、家賃は現在の都市の半分ですむはずである。¹⁰⁶ 共同体による土地所有と地代の徴収ということに関してはハワードも同様の提案をしているが、ハワードの田園都市の場合、土地は法的には出資者達による事業法人に属する。この事業法人はインフラストラクチャーを整備すると共に土地建物を所有して住民や企業に賃貸し、家賃収入は自治体の〈中央評議会〉に委託されて公共施設の建設・維持に使われるのである。¹⁰⁷ ハワードの場合、田園都市は半公営という性格を持っているが、自治体による土地の管理と貸与という点においてフリッチュの構想とハワードのそれは極めて似通っていると見えよう。

実は土地の公有化という思想は本来ユートピア思想の根幹を成す要件の一つである。プラトンの『国家』以来殆どのユートピア思想が、部分的な私有財産は認めても土地だけは公有化されるべしという思想を貫いてきた。完全な土地公有化が理想だとすれば、ハワード構想における半公営事業はトーマス・スペンスやエドワード・ベラミーといった彼の先駆者達の思想からの後退を意味しているが、都市の大きさを人口約 3 万という規模に限定して企業家の協力により土地を確保するという案はフリッチュのリベラルな構想より実行可能性という点において優れており、現に彼の案に賛同する出資者を得たハワードの田園都市構想は 1906 年にレッチワースの建設という成功例を見た。フリッチュは現存する小規模都市を改造して田園都市建築へと進めることも奨励していたが、彼の著書は殆ど反響を呼ばず、1902 年に設立されたドイツ田園都市協会もフリッチュの名には言及してもその構想の内容には全く触れていない。¹⁰⁸ 「田園都市の父」¹⁰⁹としての功績はもっぱらハワード

¹⁰⁶ *ibid.*, p.15.

¹⁰⁷ Fritsch, *ibid.*, p.13.

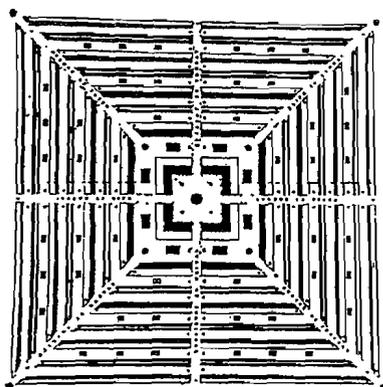
¹⁰⁸ Kampffmeyer, Hans, Ebenezer Howard und die englische Gartenstadt-Bewegung. In : Bollerey, Franziska, Gerhard Fehl, Kristiana Hartmann (Hrsg.) *Im Grünen wohnen - im Blauen planen.* Hamburg, 1990, p.100.

Kampffmeyer, Hans, *Die deutsche Gartenstadtbewegung.* In : *Die deutsche Gartenstadtbewegung.* Berlin, 1911, p.3f.

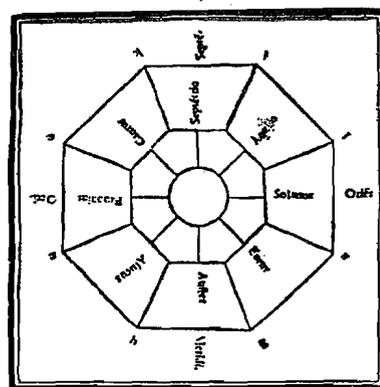
に帰することになった。

4-3. 理想都市計画の系譜

1898年に世に出たハウードの著作は実際には1893年に書かれ、出版社が見つかるまで5年を要したものである。¹¹⁰ フリッチュは自分こそ田園都市構想の起草者であるとしてハウードの“剽窃”を非難しているが、¹¹¹ 当時は農村から都市部への急激な人口移動とそれに伴う都市の住環境の悪化が顕著な社会問題となっており、複数の人の頭に同じ解決策が浮かぶのも自然な状況であった。ハウード自身、エドワード・ギボン・ウエイクフィールド、トーマス・スペンス、ハーバート・スペンサー、ジェームズ・シルク・バッキンガムらの改革案を挙げ、自らの案をその結合であると呼んでいる。¹¹²



バッキンガムの理想都市
「ヴィクトリア」(1848)



ウィトルウィウスによる理想都市の
型(紀元前1世紀)

そもそも理想都市のデザイン自体、ルネサンス以来の歴史を持っている。『ユートピア』のように文学に記された社会の理想像ではないが、^{ユルバニスマス}理想都市計画は都市構築術に主眼を置いたユートピア思想の一形態として独自の系譜を持ち、フリッチュとハウードの田園都市構想はそのような伝統に連なるものである。

放射状道路を持つ円形構造の都市形態は、ローマの建築家、ウィトルウィウスが紀元前1世紀に著した『建築十書』の中に既に記されている。¹¹³ 「理想都市」の時代となるルネサンス期には、商工業の重視や火薬と大砲の発明によって従来の都市構造を刷新する必要性が生じていた。実際に建設に至った「パルマノヴァ」を初め、建築家はこそって幾何学的

¹⁰⁹ Krückemeyer, Thomas, Gartenstadt als Reformmodell. Siegen, 1997, p.32.

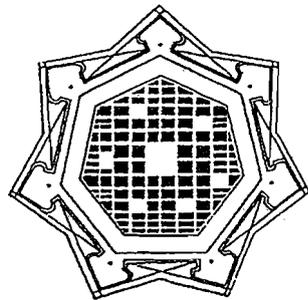
¹¹⁰ Hartmann, *ibid.*, p.33.

¹¹¹ Bergmann, Klaus, Agrarpolitik und Großstadtfeindlichkeit, Meisenheim, 1970, p.144.

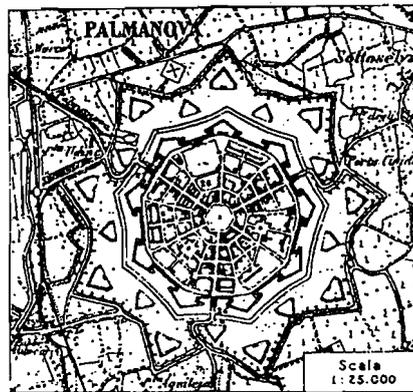
¹¹² Howard, *ibid.*, p.103.

¹¹³ 川添登『都市と文明』雪華社, 1965, p.244.

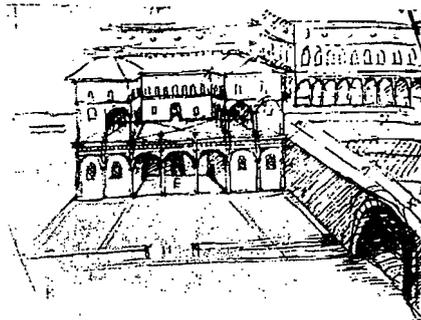
構造の理想都市像を描き、建築論も多く書かれた。¹¹⁴ レオナルド・ダ・ヴィンチもそ



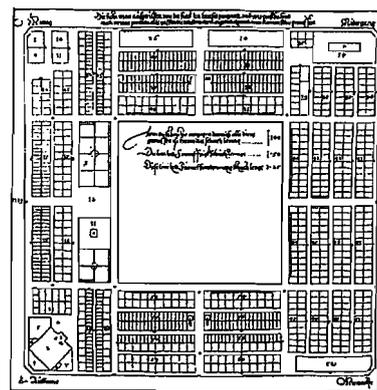
ピエトロ・カタネオの理想都市
(1554)



ヴィチェンツォ・スカモッツィの理想
都市 (1615)



ダ・ヴィンチの理想都市の計画。家と
二重構造の街路。(1480~90頃)



デューラーによる城塞都市のプラン。
『城塞、邸宅、村の防備計画に
関する講義』(1527)より。

の都市論の中で、用途によって上道と下道を使い分ける「フリッチュのそれとよく似た」街路の二重構造化を提案している。¹¹⁵

その後も都市の幾何学的な構築という考えは建築家やユートピアンを魅了し続けた。¹¹⁶ 1606年に反宗教改革による抑圧的空氣を厭うかのように書かれたトマス・カンパネッラ (Tomaso Campanella, 1568-1639)の『太陽の都』¹¹⁷も7層の環状ゾーンから成る同心円構造を持っており、また1619年にはドイツの宗教家ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ (Johann Valentin Andreae, 1586-1654)が、新教徒のためのギルド共産主義的なユートピアで

¹¹⁴ ヘレン・ロウズナウ『理想都市：その建築的展開』西川幸治監訳、鹿島出版会、1979、p.50.

¹¹⁵ レオナルド・ダ・ヴィンチ『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記(下)』杉浦明平訳、岩波書店、1958、p.272.

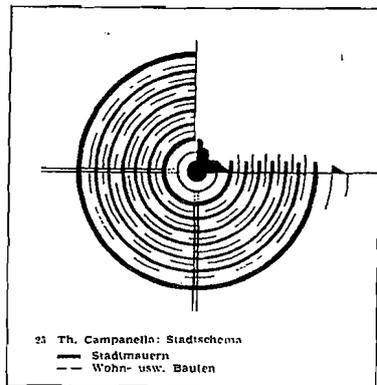
¹¹⁶ Bollerey, Franziska, *Architekturkonzeptionen der utopischen Sozialisten*. Berlin, 1991, p.104.

¹¹⁷ トマス・カンパネッラ『太陽の都』近藤恒一訳、岩波書店、1992.

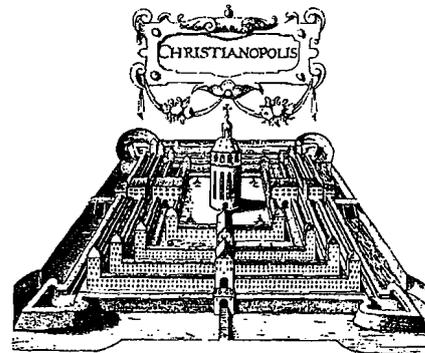
ある『クリスティアノポリス』¹¹⁸を描いている。



パルマノヴァ(1593)；スカモッツィのプランによりヴェネツィアの北西約100キロに作られた要塞都市。実現された理想都市の数少ない一例



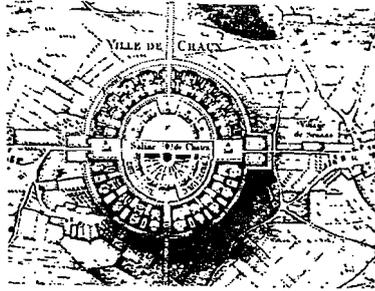
「太陽の都」(1602)から想像されるユートピアの形



「クリスティアノポリス」(1619)

啓蒙思想の影響を受け、防衛的ではなく人間解放的な都市作りを目指したクロード・ニコラス・ルドゥー(Claude Nicolas Ledoux,1736-1806)や、フーリエ主義による理想都市、またバッキンガムにも影響を与えたオーウエンの理想村落やそのアメリカでの実験場となったフロンティア計画等、理想の共同体のかたちは常に人々の心の中でデザインされてきたし、それらは互いに多くの類似点を見せる。

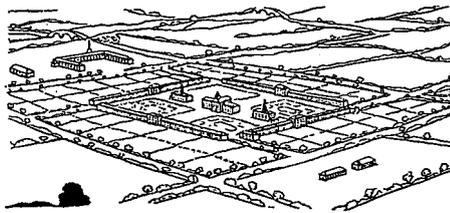
¹¹⁸ Andreae, Johann Valentin, Christianopolis; herausgegeben von Wolfgang Biesterfeld. Stuttgart, 1975.



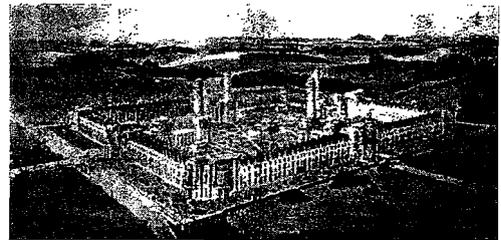
ルドゥーの理想都市, ショー (18世紀末)



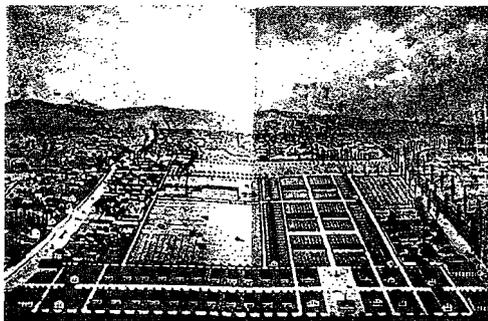
⑱フーリエ主義者の理想都市(1822)



オーウェンの理想村落 (1818)



オーウェンにより計画されたイリノイ州のニュー・ハーモニー (1824)



フーバーの労働者コロニー (1848)

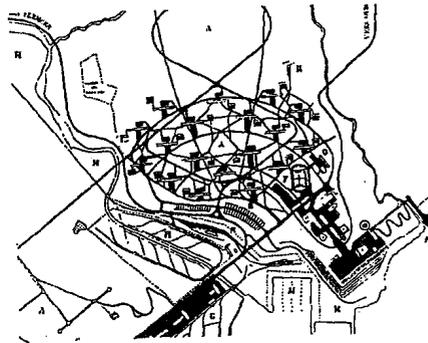


B・タウト『都市の解体』田園における労働共同体集落の図

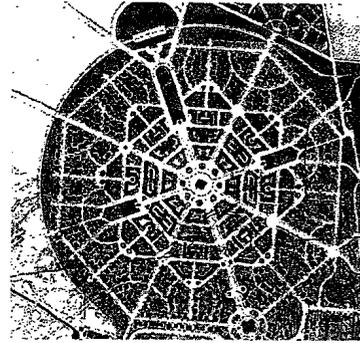
ドイツではオーウェンとフーリエに触発されたヴィクトール・エメ・フーバーが 1848 年に労働者の自主経営管理による住宅地建設を提唱した。¹¹⁹ 有機的な都市というより労働者のための村落だが、ドイツのジードルング構想の先駆けとなる。美的で機能的な住宅地作りという思想はその後も多く建築家達によって引き継がれ、例えば都市の区画ごとの機能と交通網を考慮したゾーニングはコルビュジエの都市計画にも見ることができる。レッチワース建設によって成功例を見た田園都市構想は世界各国に広まり、田園都市や郊

¹¹⁹ Hartmann, *ibid.*, p.22.

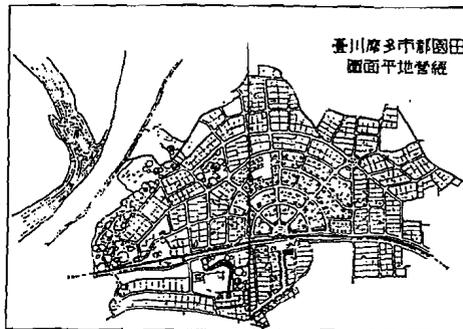
外住宅地型の^{ガーデン・サブ}田園郊外が建設されたが、¹²⁰ ユートピアン達が歴史的にその理想要件の根幹としてきた土地の公有化という思想においては、ハルトマンも指摘する通り¹²¹田園都市構想は継承されていかなかったと言わざるを得ない。



コルビュジエによるアルジェリアのヌムール計画 (1934)



ハウードの影響を受けたオランダの田園都市構想 (1905)



東京，田園調布全体計画図 (1922)

きた土地の公有化という思想においては、ハルトマンも指摘する通り³¹ 本来の田園都市構想は継承されていかなかったと言わざるを得ない。

4.4. “未来都市” と反ユートピア・反ユダヤ主義

従来指摘されている通り、多くのユートピアは自らの内に反ユートピアへ逆転していく要素を孕んでいる。¹²² プラトンの『国家』における体制維持的要素、モアの『ユートピア』に透けて見える優性思想、19世紀末のベストセラーとなったペラミーの『顧みれば』における国家統制等々、そこには自由と平等の場として我々が想像するユートピアとは相反する契機が隠されている。フリッチュの「未来の都市」も例外ではなく、それが彼の田園都市構想が当時の社会改革者達によって黙殺された理由であると言われている。

7つの層にゾーニングされた「未来の都市」は、実ははっきりとした階層秩序を示す。中で最も重要視されている中心部には聖堂や美術館、公的な施設が集められており、その

¹²⁰ 日本では1907年に田園都市の理念が紹介されたが、むしろ郊外住宅地として解釈された観がある。東秀紀『漱石の倫敦、ハウードのロンドン』中央公論社、1991、p.174ff.

¹²¹ Hartmann, *ibid.*, p.34.

¹²² 川端香男里『ユートピアの幻想』講談社、1993、p.78.

「古典地区」は「聖なる部分」¹²³と呼ばれ、特別の地位を占める。また住宅地にも階層があり、「裕福な人々には高級な住環境を提供すべき」¹²⁴だという考えによって準備される高級住宅地はより中央に、また労働者階級の住宅地は周辺に位置している。階層秩序によって裏打ちされたフリッチュの価値基準は、街が螺旋状に発展してゆく段階において「価値の少ないものを外側に追いやりながら有機的に成長する」¹²⁵といった表現に表れている。このことは中央に公園を配して殆ど階層秩序を持たず、住民の協力的精神を基盤とした自治体を目指したハワードの田園都市とは明確な相違を示す。

都市計画が現存する社会秩序の保持を志向する例はルネサンスの理想都市にも見られ、¹²⁶ダ・ヴィンチもその都市論の中で「人民はすべて服従し、その上流階級によって動かされる」¹²⁷と説いている。また 1848 年に発表されたバッキンガムの「ヴィクトリア」構想においても 7 層の同心円ゾーンが社会階層に従って配置され、¹²⁸ バッキンガムの理想がその時代の社会秩序を忠実に実現することにあつたことが窺われる。フリッチュの場合、“秩序”の偏重に加えて見受けられるのが民族主義志的志向である。『未来の都市』の中に繰り返し登場する“秩序”、“理性”、“美的”といった言葉は、ひとたび“ドイツ的”という言葉が登場しただけでドイツ的な価値観の裏打ちを露呈させる。実は『未来の都市』において明確な民族主義的言表が成されるのは一カ所のみであるが、『未来の都市』出版の翌年に補遺のようなかたちで発行された小冊子『新しい共同体』¹²⁹には、フリッチュの民族主義と優性主義¹³⁰がはっきりと打ち出されている。彼が提案する新しい共同体においては、倫理的・身体的健全さを基準に選ばれた住民達が「自由で曇りのないドイツ精神文化の発展」¹³¹を目指すのである。ドイツ田園都市協会がフリッチュの提案に殆ど言及せず、はっきりと距離を取ったのは、むしろこのようなイデオロギーに対する警戒からだったと言われている。¹³² 今日では殆ど忘れられた存在とも言えるフリッチュだが、実は彼は世紀転換期の重要な反ユダヤ主義イデオログの一人であった。

¹²³ Fritsch, *ibid.*, p.21.

¹²⁴ *ibid.*, p.10.

¹²⁵ Fritsch, *ibid.*, p.12f.

¹²⁶ 川添登, 同上, p.244.

¹²⁷ レオナルド・ダ・ヴィンチ, 同上, p.269.

¹²⁸ ヘレン・ロウズナウ, 同上, p.152.

¹²⁹ Fritsch, Theodor, *Neue Gemeinde*. Leipzig, 1897.

¹³⁰ 優生学的都市構想はイギリスにも存在しており、科学者のフランシス・ガルトン(Sir Francis Galton, 1822-1911)が 1910 年に発表した「何処か知らず郷(Kantsaywhere)」の構想では、進化的な意味で優秀な人種が田園都市から生まれると説かれている。(cf. Voigt, Wolfgang, *Die Gartenstadt als eugenisches Utopia*. In : Bollerey, Franziska, Gerhard Fehl, Kristiana Hartmann (Hrsg.) *Im Grünen wohnen - im Blauen planen*. Hamburg, 1990, p301-314)。

¹³¹ Fritsch, *ibid.*, p.7.

¹³² Hartmann, *ibid.*, p.33.

フリッチュの社会意識が形成された 1870 年代は、ユダヤ人市民権の確立や株価の暴落、東方ユダヤ人の流入等を背景にして近代反ユダヤ主義の第一波が起こった時期である。トライチュケやチェンバレンといった著名な学者や政治家が反ユダヤ主義を鼓舞するようになり、フリッチュも社会改革と同時に反ユダヤ主義に傾倒していく。1887 年に『反ユダヤ主義者の教理問答』を自ら出版して以来、1933 年に没するまで約 40 冊の著作を著しているが、その殆どが『贗神ヤハヴェの証明』¹³³や『ユダヤ人の成功の秘密』¹³⁴といった反ユダヤ思想の喧伝書である。中でも『反ユダヤ主義者の教理問答』を改訂した『ユダヤ問題の手引書』¹³⁵は、1919 年から 44 年までの間に 49 版を重ねるほど多くの読者を得た。これらの著作は歴史的解説やユダヤ教義の紹介といった学問的な粉飾を施してはいるが、基本的に“ユダヤ人は「人種的変種」、「劣等民族」¹³⁶であって人類全体にとって有害な存在である”と説く誹謗の書である。また、前述の『二つの根本害悪 — 土地成金と証券取引』で扱われている財産と土地所有の偏在という問題も、フリッチュのプロバガンダの中では大都市住民に見られる倫理的墮落と共に「ユダヤ禍」と結びつけられ、最終的に「不可視の支配者」であるユダヤ人の影響を排してドイツ民族の没落を防がねばならないという論旨に発展してゆく。¹³⁷ これらの害悪から自由な、健全な都市作りの提案として著されたのが『未来の都市』である。

『ユダヤ問題の手引書』が 1931 年に 30 版を重ねた時、版元のハンマー社が発行する「ハンマー新聞」にヒトラーが次のような推薦文を寄せている。「私はウィーンにおける青年時代の早い時期に、既にこの本を熟知していた。私はこの本が国家社会主義的反ユダヤ主義の運動を準備するのに特別の貢献を果たしたと確信する者である。(…) この手引がさらに版を重ね、いつか一家に一冊具えられることを望む。」¹³⁸ また、同年の「ハンマー新聞」に載った当時のナチ党宣伝部長、グレゴール・シュトラッサーの以下のような発言には、フリッチュの影響力の大きさが窺われる。「これまで 2000 回にも及ぶ集会を重ねるうち、私はフリッチュによって民族主義思想を学んだという人間に何百となく会ってきた。彼らは今日我々の国家社会党の地方組織で堅固な基盤を形勢している人物達である。」¹³⁹

しかしフリッチュのイデオログとしての活動は著書の出版や新聞の発行によるばかりではなかった。彼の出版社である「ハンマー社」は書物の出版のみならず「ユダヤ人の店で買うな! (Kauft nicht bei Juden!)」といった反ユダヤ的スローガンを掲げるポスターやフライヤーの類が大量に印刷・配布される拠点でもあった。「1890 年 7 月以降、ライブツィ

¹³³ Fritsch, Theodor, *Mein Beweis-Material gegen Jahwe*, Leipzig, 1911.

¹³⁴ Fritsch, Theodor, *Das Rätsel des jüdischen Erfolges*, Leipzig, 1919.

¹³⁵ Fritsch, Theodor, *Handbuch der Judenfrage*. Hamburg, 1919.

¹³⁶ Fritsch, *ibid.*, p.7.

¹³⁷ Fritsch, Theodor, *Die Sünden der Großfinanz*. Leipzig, 1927, p.6f.

¹³⁸ Phelps, *ibid.*, p.448.

¹³⁹ Phelps, *ibid.*, p.448.

平井正『ドイツ悲劇の誕生〔2〕ダダ／ナチ 1920-1925』せりか書房, 1993. p.428.

ヒからは毎日3, 4千のフライアーが世に送り出されていた¹⁴⁰という記録がある。ハンマー出版社のメディアが発するこれらのプロパガンダが、世紀末からヴァイマル時代にかけて第二波と呼ばれる反ユダヤ主義の高まりを醸成したことは容易に想像される。

そして社会改革者フリッチュのもう一つの側面は、共同体指導者としてのそれである。まずは1907年に「ハンマー新聞」の読者の中から「ドイツ刷新共同体(Deutsch Erneuerungs-Gemeinde)」が結成され、ベルリン北西に位置するブリグニッツで“郷里”を意味する「ハイムラント(Heimland)」という名のジードルング建設が開始される。¹⁴¹『未来の都市』および『新しい共同体』における構想を実現する場、そして“地と大地”のイデオロギー発現の場が出来たわけである。1910年代には既にハワードとドイツ田園都市協会の活動により「田園都市」という概念が普及し、田園都市建設活動も始まっていたが、フリッチュによると「彼等の意味するものは、庭を持った一戸建ての高級住宅地といったものにすぎず」、「ハイムラント」のプロジェクトこそが土地改革を伴った理性的土地共同体として有機的な「田園都市」へと発展していくはずであった。¹⁴²「ハイムラント」プロジェクトは最終的には失敗に終わるが、団体としての「ドイツ刷新共同体」は後に秘密結社的な「ゲルマン騎士団(Germanen Orden)」を下部組織として持つ「帝国ハンマー同盟(Reichshammerbund)」に成長し、ヴァイマル時代に入るとそれぞれが「ドイツ民族攻守同盟」と「トゥーレ協会」に吸収される。「ゲルマン民族主義イデオロギーの信じ難いコングロマリット」¹⁴³とも言われる「ゲルマン騎士団」の機関誌「ルーネン(Runen)」は、この時「フェルキッシャー・ベオーバハター」と名を変え、それが1920年にナチ党に買収されてナチ党機関紙となるのである。¹⁴⁴40冊以上の著書を世に残したフリッチュの作家としての活動は実は理想の共同体を設立・運営するための手段に過ぎず、共同体指導者として行使した力こそ彼が反ユダヤ的民族主義の展開に及ぼした最も危険な影響であったと言われている。¹⁴⁵

フリッチュ自身は「ドイツ民族自由党(Deutschvölkische Freiheitspartei)」¹⁴⁶の帝国議会議員だったのでナチ党とは直接の関わりを持たなかったが、1933年にフリッチュの葬儀が名誉国民的な扱いで行われた時、ナチス政府の内相ヴィルヘルム・フリックが「フリッチュの著作は、闘争のための最初にして最善の装備であった」という弔辞を寄せており、ユリウス・シュトライヒャーは「いつかドイツの子供達は、フリッチュがドイツ民族の救済、

¹⁴⁰ Greive, Hermann, *Geschichte des modernen Antisemitismus in Deutschland*. Darmstadt, 1988, p.70.

¹⁴¹ フリッチュは『未来の都市』第2版(1912)の後記中でも「ジードルング協会ハイムラント(Siedlungs-genossenschaft Heimland)」への参加を呼びかけている。

¹⁴² Fritsch, *Die Stadt der Zukunft*, p.32.

¹⁴³ Greive, *ibid.*, p.107.

¹⁴⁴ 平井正, 同上, p.63.

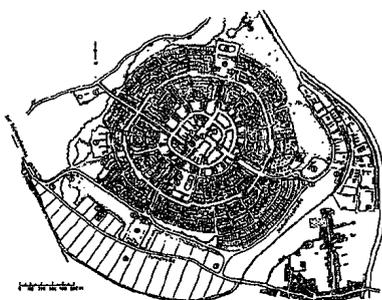
¹⁴⁵ 文献7, p.445.

¹⁴⁶ 1893年に「反ユダヤ主義ドイツ社会党(Antisemitische Deutsch-Soziale Partei)」としてや「ドイツ社会改革党(Deutsch-Soziale Reformpartei)」を経由している。Greive, *ibid.*, p.68f.

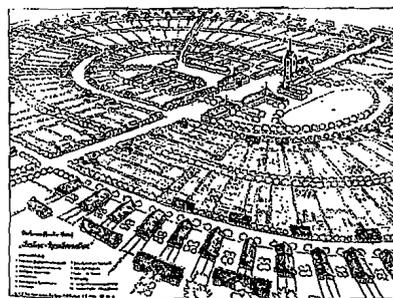
ひいてはアーリア人種の救済に貢献したと言うだろう。」という賛辞を贈っている。¹⁴⁷ 歴史家のR・フェルプスは、フリッチュを「おそらくヒトラー以前の最も重要な反ユダヤ主義者」¹⁴⁸と呼んでいるが、反ユダヤ主義のイデオログとして多面的に活躍したシュルツェ-ナウムブルクやアルフレート・ローゼンベルクと同様に、フリッチュもナチスの文化政策に対して直接・間接的に様々な影響を与えた人物であることに間違いはないだろう。

4-5. 田園都市構想から国家構想へ

しかしその民族主義的志向にも拘わらず、フリッチュの田園都市構想がそれ以前の理想都市計画を集約するような仕事であったことは否定すべからざる事実であり、その意味においてそれは従来以上の評価に値するものである。¹⁴⁹ またハワードの田園都市構想が自治体経営のための提案であったのに対し、フリッチュのそれは国家構想へと拡大していく射程を明確に持っていたことも考察に値する。フリッチュは田園都市を、国家を形成する共同体のユニットとして考えていた。そのことは『未来の都市』の後半部で彼が都市住民の健康に言及するとき明らかになる。フリッチュによると、高額な家賃に起因する一家屋の狭隘さや居住者数の多さ、それに比例する死亡率や婚外子出生率の高さ、結婚や健全な家庭生活へ至る困難は結果的に国民的・国家的な損失を招く。所有地の売買が禁止されているイギリスの住環境が良好な国家経済の基盤となっているのとは対照的である、と彼は説く。¹⁵⁰ 住環境の問題は最終的には国家的な問題であるが、国家というものの抽象的な性格故に真に実行可能な国家規模の改革を提案する者は少ない。それは問題の表面のみにとらわれてその根源にある「土地」を見ないからであり、従ってまず都市レベルにおける改善策、つまり田園都市の建設から着手することにより漸次的に国家の理性的な再建への道を歩むべきだ、¹⁵¹というのがフリッチュの結論である。



ナチス時代の都市構想(1935)



ナチス時代の理想的村落プラン(1939)

¹⁴⁷ Phelps, *ibid.*, p.449.

¹⁴⁸ *ibid.*, p.443.

¹⁴⁹ Muthesius, Stefan, *Das englische Vorbild*. München, 1974, p.162.

¹⁵⁰ Fritsch, *ibid.*, p.28.

¹⁵¹ *ibid.*, p.29.

『未来の都市』が書かれた 1890 年代のドイツでは、急激な都市人口の増加による出生率の低下や疾患の増加、犯罪率の上昇やハンブルクにおけるコレラの流行等が同時に起きていた。¹⁵²そして「健康」というイデオロギーが形成され始め、健康食品の製造や菜食主義コロニーの建設、¹⁵³ また公的な機関による衛生面でのインフラストラクチャーの整備が始まっている。¹⁵⁴「健康問題」は「国家的問題」となりつつあった。フリッチュにとっても共同体経営の目標は、出自の定かならぬ大資本と文化的影響を排して中流階級のみから成る健全で平等な国家を建設することになる。それが彼にとっての「理想的な範型としての国家」であり、プラトンに倣って言うならば、それを見んと欲したそれを望む者達にとってはおそらくその国はドイツという精神風土上に存在したのだ。ナチ党は政権掌握翌年の 1934 年、国内の様々な住宅改善運動組織を全て統括して「労働戦線住宅局 (Heimstättenamt der Deutschen Arbeitsfront)」を作っている。¹⁵⁵

フリッチュの田園都市構想を、ユートピアと同様に現実超越的方向性を持つが「真に革命的な機能は持たず現存する存在秩序に有機的に組み込まれるものとして」、¹⁵⁶ あるいは個人の思想の産物ではなくむしろ集団的意識に属するものとして¹⁵⁷ユートピアではなくイデオロギーの体系に分類することは可能である。しかし何を革命的と呼ぶかは存在現実のどの段階に基準を置くかによって流動することはマンハイムも認める通りであるし、¹⁵⁸ 個人的思想であるユートピアもその個人の社会的基盤に基づいているという点においては集団的とも言える。¹⁵⁹ フリッチュの存在超越的思想を真に個性的にしているのは、そのドイツのイデオロギー性よりも、むしろユートピア思想に特徴的な観念が複合的に表れている点である。

『ユートピアの系譜』を著したルイス・マンフォードは、近世のユートピア像の変遷を記述する際、「田舎の大邸宅」、「石炭の町」、「国家的ユートピア」という 3 つの主要な観念を挙げている。¹⁶⁰「田舎の大邸宅」は、人が防衛のために城壁を築くことをやめ、個人的自由を享受しようとして快適な郊外へ住むことを望んだ時代、つまり中世社会の秩序が近代社会のそれに変貌しようとする際に生まれたユートピアのパターンである。「石炭の町」というユートピアは産業時代の産物であり、個人的ユートピアの欠陥を「集会的代表制」

¹⁵² Krabbe, *ibid.*, p.22f.

¹⁵³ Baumgartner, *ibid.*

副島博彦「世紀末エデンの園」In「あもるふ」第3号, 東京工業大学ドイツ語教室, 1997. p31-45.

¹⁵⁴ 長谷川章『世紀末の都市と身体』ブリュッケ, 2000, p.48.

¹⁵⁵ Hafner, Thomas, *Eigenheim und Kleinsiedlung*. In: Kähler, Gert (Hrsg.), *Geschichte des Wohnens*. Bd. 4. 1918-1945. Stuttgart, 1996, p.584.

¹⁵⁶ カール・マンハイム, 同上, p.202.

¹⁵⁷ 川端香男里, 同上,p.31f.

¹⁵⁸ カール・マンハイム, 同上, p.207.

¹⁵⁹ カール・マンハイム, 同上, p.214.

¹⁶⁰ ルイス・マンフォード, 『ユートピアの系譜』関裕三郎訳, 新泉社, 2000, p.189ff.

という制度で償おうという精神に裏打ちされている。製品の生産と販売を都市活動の中心とし、蓄積された資本の公正な分配という目標を持っていた。「国家的ユートピア」は上記の二つを結び合わせる結合組織であり、「国民国家」の社会神話である。マンフォードによると「石炭の町」と「田園の大邸宅」との和解は、同一社会内の他の集団との共通性を強調するために「他のユートピア国家からの侵略の危険性を常に喧伝することによって」¹⁶¹行われる。フリッチュのユートピアは工場の設置を起点に置く産業都市でありながら田園の快適さを保持する田園都市であり、かつそれが最終的には国家構想であるという点においてハワードその他の理想都市構想とは一線を画するものである。マンフォードは「ユートピア的国家」を「奇跡同然」、「紙上の世界の完成に過ぎぬ」ものとし、上記の和解が「実施される道具立てを一層注意深く調査してみるとしたら、さぞかし興味深いことであろう」と言っているが、¹⁶²フリッチュが提唱した類のユートピアの虚偽性は、実現の段階に至ると興味深いでは済まされなかったことは歴史が示す通りである。ユートピア思想とそれが誕生した社会の性格との結び付きを言うならばフリッチュの田園都市構想は国家社会主義が生まれる途上のドイツ社会に特徴的な現象であったことは言を待たないが、フリッチュの都市ユートピアは上記の3段階のユートピア要素を個体発生的に具有している点において個性的と呼ぶに値するものであり、それは理想社会の探求であるユートピアの系譜上により強く記憶されるべきものであろう。

しかしドイツ田園都市協会がフリッチュの思想とは距離を取ったとは言え、その後の活動において民族主義思想から全く自由であったわけではない。ドイツ最初の田園都市であるヘレラウの共同体にも国家社会主義思想が徐々に介入していったことは、やはり無視できない事実である。

5. 田園都市ヘレラウの誕生

5-1. “ヘレラウの子供たち”

アメリカの作家アプトン・シンクレアのピュリッツァー賞受賞作品に、ナチス支配下のドイツを扱ったシリーズ『世界の終わり』と『竜の歯』¹⁶³がある。主人公のアメリカ人青年は少年時代の一時期をドレスデン郊外のヘレラウで過ごし、地元の子供たちと共に学び、年に一度開催される祝祭週間を体験する。その時上演されたグルックのオペラ「オルフェウス」を見て彼が感銘を受ける場面を、シンクレアは次のように締めくくっている。「いずれ必ずヘレラウの子供たちの中から未来のオルフェウスが現れ、人々の感覚を魅了し、精神を鼓舞し、貪欲や憎悪の嵐を鎮めるだろう。そして戦争は避けられるだろう。国家間の戦争のみならず、ヨーロッパを引き裂こうとしている苛烈な階級闘争までも。ダルクローズ学校の富裕階級の生徒たちは、工場地区である郊外の労働者たちの子弟と肩を並

¹⁶¹ ルイス・マンフォード、同上、p.214.

¹⁶² ルイス・マンフォード、同上、p.210.

¹⁶³ Sinclair, Upton, *World's end*, New York, 1940; *Dragon's teeth*, New York, 1942.

べて一緒に踊っているのではないか。ミューズの神殿の中には階級も国民も人種もない。あるものはただ、美と歓喜の夢を抱いた人間性のみである。それが1913年、芸術を愛する者皆の信念だった。それがこの明るい牧場の上に建つ高くて白い神殿で教えられていた信条だった。この幸運な現代の日々に、文明の発展は必然となり、不可避となった。」¹⁶⁴

“ヘレラウの子供たち”とは、1909年に建設されたドイツ最初の田園都市に育つ子供たちのことである。ヘレラウは労働者に良質の住宅を提供すると同時に自立した自主管理的共同体を作り、さらに芸術教育によって“新しい人間”を育てるという希望のもとに建設された。また芸術家や作家たちが住み集うことによって生まれたヘレラウの芸術家コロニーは、新たな文化の発信地となることを目指して意欲的に活動していた。ヘレラウの子供たちは、ダルクローズ学校でリトミック教育を受け、ドイツ工芸工房で工作を学び、皆が庭付き住宅に住むという恵まれた住環境で育つ子供たちであった。シンクレアは実際1913年の祝祭週間にヘレラウを訪れて芸術家コロニーに住む作家たちと交流を持っている。経済・社会改革運動の指導者でもあった彼がこの生まれたばかりの田園都市に満ちていた期待や高揚感を人々と共有したであろうことは、上記の筆致からも容易に想像することができる。ヘレラウに集った人々は、「新たな人生哲学と改革志向の時代、総合的な人間性探求と計画的な芸術教育の時代」¹⁶⁵の到来を感じていた。

田園都市運動は、産業革命の過程において悪化した都市の住環境を改善し、疲弊した人々の人間性を回復し、健康で快適かつ公正な社会生活を構築しようとする総合的な社会改革である。それはまた工業を否定することなく農業や自然と併存させ、かつ芸術活動を奨励することによって人間的な生産社会を創ることを目指した、言うなればモダニズム時代におけるユートピア像の一つの顕現であった。

ヘレラウの建設はドイツにおける田園都市建設運動の最初の実例として記録されるのみならず、その個性的な芸術教育運動との結びつきにおいても特筆されるべき出来事である。また二度の大戦とナチズムの台頭、東西ドイツの分断という歴史の奔流に翻弄されて理想の実現が阻まれたことこのことの悲劇性においても、ヘレラウの名は記憶されるべきかもしれない。いずれにしても生活改革運動の代表的な結実の例として、ヘレラウの歴史は個別的に記述する必要がある。

5-2. カール・シュミットとドレスデン・クラフト工芸工房

イギリス最初の田園都市レッチワースの建設に出資したのはチョコレート会社のキャドバリーと石鹼会社リヴァーの二つの企業であったが、ヘレラウの言わば生みの親となったカール・シュミット(Karl Camillo Schmidt, 1873-1948)もやはり家具工場を興した企業家だった。シュミットはケムニッツ近郊の織物職人の家庭に生まれ、親族に椅子の製造者がいたこともあって10才の頃から家具職人になることを夢見て育つ。ケムニッツで徒弟時代を

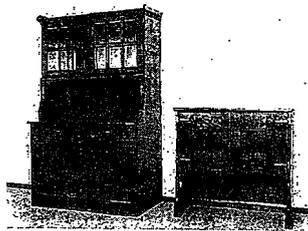
164 Sinclair, Upton, World's end, p.5.

165 Ring, Reinhard, Das verklärte, das reale und das beispielhafte Hellerau, in : Ring, Reinhard (Hrsg.), Hellerau Symposium, Remscheid, 1993, p.119.

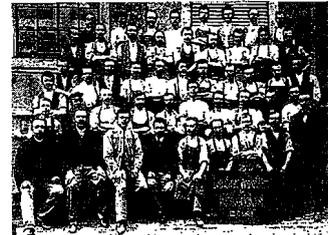
過ごした後、ドイツの職人的伝統に則って北ドイツ、デンマーク、スウェーデン、ロンドンへと修行の旅に赴き、起業家精神や機械化された生産方式を学ぶ。特にロンドン滞在中、キャドバリー社の進歩的な労働者コロニーやアーツ・アンド・クラフツ運動に影響を受け、また産業革命の社会的問題点や大量生産の問題点を目の当たりにして、家具工場の将来的責任は効率、芸術性、労働の社会的側面の3点を向上させることであり¹⁶⁶、製作自体の課題は工業と芸術の融合を図りつつ素材と目的に適った家具を製作することであると考えるようになる。¹⁶⁷ そしてドレスデンに帰ってマイスターとなった後、1898年に協力者を得て家具製作会社「ドレスデン・クラフト工芸工房 (Dresdner Werkstätten für Handwerkskunst)」を興すのである。



カール・シュミット、
1909.



「ドレスデン・クラフト工芸工房」による家具、1901.



「ドレスデン・クラフト工芸工房」の従業員、1906.

当時のドレスデンではちょうど工芸に関する関心が高まりつつあり、工芸博物館において装飾や工芸の様々な展覧会が開催されていた。シュミットは建築家や芸術家との共同作業を重視して社員に展覧会やコンペへの参加を奨励し、1900年の住宅展示会コンペではクラフト工芸工房が賞を取ることになる。課題はドイツ風で質素な市民用住宅のデザインで、居間・寝室・台所の内装全体を750マルクで仕上げることが条件だった。1890年代は低所得者用住宅の建設が建築家の課題として認識され始めた時代であり、ベルリンでも初めての「労働者住宅設計図展示会」が1892年に開かれている。また「芸術の番人(Kunstwart)」「装飾芸術(Dekorative Kunst)」「ドイツの芸術と装飾(Deutsche Kunst und Dekoration)」といった雑誌が外国の模倣に依らない芸術を奨励し、装飾がユーゲントシュティールを志向する一方で建築は機能的で質実な美を求めていた。シュミットの存在と彼の工房は業界でその名を知られるようになり、同様の理想を抱く文筆家や建築家たちとの交流が始まる。中でも彼の最も重要な協力者となったのが、ミュンヘン出身の画家兼建築家で1900年当時ユーゲントシュティールの限界を見極めニールンベルクで低所得者用住宅のデザインを手がけていたリヒャルト・リーマーシュミット(Richard Riemerschmidt, 1868-1957)で、彼は後にヘレラウの主要なデザインを手がけることになる。さらに7年間の英国滞在経験を生か

¹⁶⁶ Fasshauer, Michael Das Phänomen Hellerau, 1997, Dresden. p.15.

¹⁶⁷ Peschel, Peter, Karl Schmidt und seine Werkstätten für Handwerkskunst, in: Dresdner Hefte, Jrg. 15, Heft 51, Dresden, 1997, p. 4.

して一戸建て建築に関する著書を著していたヘルマン・ムテーズィウス(Herman Muthesius, 1861-1927)やトリーアの専門学校で建築を教え、やはり小規模住宅に最大の関心を抱いていたハインリヒ・テッセノウ(Heinrich Tessenow, 1876-1950)がそれに続くことになる。また思想面における重要な支援者となったのは後にヴァイマル憲法の起草者となる政治家のフリードリヒ・ナウマン(Friedrich Naumann, 1860-1919)である。ナウマンは 1896 年、“土地改革の父”と呼ばれた社会改革者のアドルフ・ダマシュケ等と共に国民社会協会(der Nationalsozialer Verein)を結成しており、特にキリスト教精神に基づいた社会改革のプロパガンディストとして活動していた。芸術教育運動にも関わると同時に DGG の会員でもあり、1904 年からは帝国議会議員となっている。

そのような芸術関係者の集まりから、1907 年に前述の「ドイツ工作連盟(Deutscher Werkbund)」が設立される。芸術と産業を結合させた成功例としてその名を知られていた「ドレスデン・クラフト工芸工房」にその事務所が置かれ、シュミットの工場は進歩的な建築家・工芸家たちに連携の機会を提供する場となる。芸術教育にも関心のあったシュミットが企業の教育実践としてまず実践したのが工場内の職人養成であったが、従来の徒弟制度のもとでは真に個人的な創造性を涵養することは困難であると実感するに至り、¹⁶⁸代わってより大規模な事業計画が誕生することになる。

5-3. ヘレラウの始まり

ドレスデン・クラフト工芸工房は成長して 1906 年には 250 名の従業員を数えるようになり、しかも翌年「ミュンヘン家具工房(Münchener Werkstätten für Wohnungseinrichtung)」と合併して「ドイツ・クラフト工芸工房(Deutsche Werkstätten für Handwerkskunst GmbH)」となる。工場新築の必要性に迫られたシュミットがドイツ工作連盟の仲間に相談したところ、皆が揃って提案したのが田園都市の建設であった。シュミットがそれからドレスデン郊外に適切な土地を見つけて 73 人の地権者と買い付け交渉に入るまで、さほど時間はかからなかった。2つの村落を統合した新たな地所は、シュミットによって“ヘレラウ”と名付けられる。彼は以下の 3 点を田園都市建設における自分の責務と考えていた。工場を建設して安定した労働の場を提供すること、良質の住宅を労働者に提供すること、そして田園都市構想に賛同する工場労働者以外の多様な住民を勧誘し、文化的・社会的に自立した共同体を作り上げることである。シュミットがまず計画したのは「ドイツ・クラフト工芸工房」の工場と社屋、社員の住宅として 100 戸の家族用住居、独身者用の寮、市民層を対象とした中規模住宅の建設で、後の計画として商店や医院の誘致と幼稚園やサナトリウムの建設が予定されていた。

住民を募って理想的な共同体を創るためには田園都市構想に対する周囲の理解と賛同が不可欠であったが、ちょうどその年ハウードの著書が翻訳されてドイツ語で読めるようになり¹⁶⁹、シュミットの周りの多くの人々が彼の田園都市建設計画に関心を示すようにな

¹⁶⁸ Fasshauer, *ibid.*, p. 53.

¹⁶⁹ Howard, Ebenezer, *Stadt in Sicht*, Jena, 1907.

る。彼らの討論はウィーンの建築家オット・ヴァーグナーの伝記を著した芸術史家のJ・A・ルクス(Joseph August Lux)によってまとめられ、「これは空想上の話でも理想論でもなく、冷静で現実的な考察である。」というコメントと共に本として出版されるほどであった。¹⁷⁰ シュミットの計画実現にあたり、最も強力な推進役となったのが「ドイツ工作連盟」の秘書役を勤めていたヴォルフ・ドールン(Wolf Dohrn, 1878-1914)である。ドールンはナポリの水族館を設立した海洋学者のアントン・ドールンを父に、歴史書の翻訳を行う白ロシア人女性を母に持ち、ナポリの学際的環境のもとに育ったコスモポリタンであった。彼の再従兄弟にはヴィルヘルム・フルトヴェングラーがいる。ドイツで文学・美学・哲学・経済学を修めたドールンは、フリードリヒ・ナウマンに師事して政治家になることを考えていたが、ナウマンの紹介でシュミットのもとに赴き、彼の事業の事務的な側面を支えていた。シュミット、リーマーシュミット、ドールンの三者はそれぞれヘレラウの建設においてちょうど出資者、主任デザイナー、オーガナイザーの役割を果たしていたが、中でも田園都市構想の社会改革的側面、特に土地改革思想に最も強く魅せられ、新たな共同体創造に向かってユートピスト的楽観主義で邁進していったのが理想主義者のドールンであった。彼は田園都市準備委員会を指揮して資金提供者を集めるなど、田園都市の運営面において重要な牽引的役割を果たす一方、ヘレラウ建設計画をまとめてその名も『田園都市ヘレラウ』という著書を残す。¹⁷¹ そして1908年、140haの土地購入手続きが完了し、土地の法的な所有者としてシュミット、リーマーシュミット、ドールンの三名によって「田園都市ヘレラウ株式会社(Gartenstadt Hellerau GmbH)」が設立され、同時にシュミットとザクセン州との交渉によって路面電車の路線をドレスデンからヘレラウまで延長するための計画が州議会で可決される。そして翌年の4月1日にドイツ最初の田園都市建設が始まることになる。ヘレラウの土地は工場地域、小住宅地域、邸宅地域、公共用地、保留地の5つのゾーンに分けられ、「ドイツ・クラフト工芸工房」が所有する工場地域以外はすべてが共同体の所有とされた。さらに低所得者のための小住宅を建設・運営する団体として「ヘレラウ建設組合(Baugenossenschaft Hellerau GmbH)」が組織され、「ドイツ・クラフト工芸工房」、「田園都市ヘレラウ株式会社」、「ヘレラウ建設組合」の3つの組織が共同でヘレラウの土地を所有・管理することになる。さらにこれらの組織の上にシュミット、ドールン、リーマーシュミットにムテズィウス、テオドル・フィッシャー等の建築家を加えた9名からなる「建築・芸術鑑査委員会(Bau- und Kunstkommission)」が置かれ、個々の建物が全体の審美的基準と目的に合致しているかを鑑査する役割を果たした。

ヘレラウの建設における最も困難かつ重要な課題は低所得者用の住宅群だった。リーマーシュミットは、クラフト工芸工房の従業員に対するアンケート調査や労働者コロニーの視察を行いながら、2~6人の子供があり年収1000~2000マルクの家族用に、建築面積250平米以下で年間家賃が300マルク以下の小規模住宅を建てることになる。しかも住環境改善策として各戸は最低でも共用の浴室・洗濯室と3部屋以上を備え、独立した玄関と100

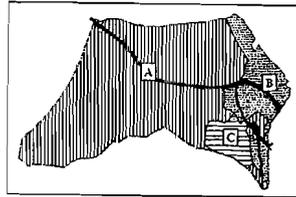
¹⁷⁰ Fasshauer, *ibid.*, p. 65.

¹⁷¹ Dohrn, Wolf, Gartenstadt Hellerau, Leipzig, 1907.

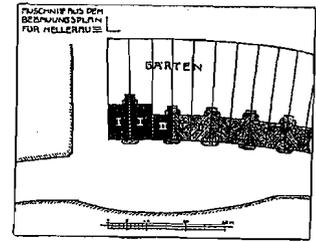
～200 平米の庭があること等々の条件があった。結果として 51 平米の最小のものを初め 34 種の小住宅 200 戸が誕生し、それらは「ドイツで最も建設費の安い住宅」と言われた。¹⁷²



ヘレラウの全体図



3つの組織による土地の分割
 A-「田園都市ヘレラウ株式会社」
 B-「ヘレラウ建設組合」
 C-「ドイツ・クラフト工芸工房」



小住宅群のデザイン、白い区画が庭

それに対し、「田園都市ヘレラウ株式会社」に属する“邸宅地区”に関しては、居住希望者がヘレラウの提示する土地と住宅タイプの中から気に入ったものを選び、借地権と建設費の一部をローンで支払いながら住むという方法が採られた。邸宅と言っても一戸建てという意味で、その規模はむしろ質素なものであったが、住宅部分は敷地全体の 1/5 であることという条件を守れば基本的には個人の注文住宅であるという美点があった。¹⁷³



小住宅地区



邸宅の一例



ヘレラウへの勧誘広告

ヘレラウは 1920 年代半ばまでに全体を完成させる予定で建設が開始され、1910 年にまず 60 家族によって共同体経営が始まる。そして 1913 年には 407 世帯分 383 戸の住宅が完成し、400 家族 1900 人が住む規模に成長している。¹⁷⁴内外からのヘレラウ批判として、まず「ヘレラウ建設組合」に参加するための組合費も加算すると小住宅の家賃は安いとは言えないこと、小住宅地区と邸宅地区の分離が階級差の温存につながること等の指摘があっ

¹⁷² Fasshauer, *ibid.*, p. 82.

¹⁷³ 地価の上昇に鑑みて田園都市の住民全体の福利にかなう場合、個々の住宅購入が許可された。

¹⁷⁴ Sarfert, *ibid.*, p. 25.

た。また、「ドイツ・クラフト工芸工房」の社屋は、「労働、住居、芸術、自然」の調和という理念のもとにリーマーシュミットによって大農場風の南ドイツ様式で建設され、1912年にヘレラウを訪れた E・ハワードに「ヘレラウ工場ほど美しい工場を我々は持たない」と賞賛されたが、グローピウス等のバウハウス派には「即物性に欠けた農場ロマン主義」と揶揄された。¹⁷⁵ しかし“ヘレラウ共同体の理念は「外的刺激によって無防備に突き動かされつつ生活するような寄る辺なき状態と無政府的精神状態を、新種の生活理想像に駆られることなく存在の事実と成長によって克服すること」¹⁷⁶である”というドールンの言葉からは、ロマン主義というより質実な生活の充実感への願望が感じられる。そして“存在の事実と成長”を共同体の中で育む活力として、芸術教育が必要とされていた。



「ドイツ・クラフト工芸工房」



ヘレラウ, 1933.

5-4. ダルクローズ学校とヘレラウの芸術教育

住宅改革と土地改革が芸術教育運動と結びついている点は、ドイツ的田園都市思想の特徴である。労働と生活と芸術の融合は“人間存在の高次元への発展”¹⁷⁷を可能にするという考えは、産業化によってもたらされた文化ペシミズムを芸術教育によって乗り越え、人間性を産業革命以前の健全な状態に“再生”しようとする感情生活の刷新欲求に基づいていた。前述の“新しい人間”創造への欲求である。同時に芸術は素人の参加によって様式の硬直から免れるという考えがあった。ヘレラウではどのような芸術を中心に据えるべきかについて、音楽教育の重要性を説いたのはシュミットの仲間の一人でチェコの音楽家、リヒャルト・バトカ(Richard Batka)である。バトカは造形芸術が基本的に個人の創造であるのに対し、音楽教育は個人的感性の涵養であると同時に合唱や合奏、ダンス等を通じて社会性を養い協調的な活動を可能にする点を指摘した。そして彼が推薦したのがジュネーヴのコンセルヴァトワールで実践されていた「リトミック教育」である。「リトミック教育」はリズムの体得と表現を中心とした音楽教育で、ウィーン生まれのスイス人、エミール・ジャック-ダルクローズ(Emile Jaque-Dalcroze, 1865-1950)によって提唱された。またそれは新しい身体性を希求していた当時の時代精神に合致したものだだった。

19世紀末のドイツでは、物質主義や都市における人間性の硬直をもたらした文明編重主

¹⁷⁵ *ibid.*, p. 74.

¹⁷⁶ *ibid.*, p. 106.

¹⁷⁷ Schollmeier, *ibid.*, p. 67.

義への反発から自然への回帰、特に身体の再発見が求められていた。ワンダーフォーゲル、裸体運動、菜食主義運動、イサドラ・ダンカン等に触発されたモダン・ダンス・ムーヴメントなど、様々な運動が自然と融合する身体を志向していた。身体に内在するリズムが人間生活の要素として“再発見”され、人々はそれが生を規定する原理と深く関連していることに気づく。経済学者のカール・ビューチャー(Karl Bücher)が『労働とリズム』¹⁷⁸を著し、文学や美学の分野でも聴覚刺激や身体感覚が関心の対象となる。¹⁷⁹そしてリズム教育を芸術教育の方法として組み入れた最初の一人がダルクローズだった。ダルクローズはウィーンに生まれ、ウィーンとパリで音楽を学んだ後 1892 からジュネーヴのコンセルヴァトワールで音楽史とハーモニー理論を教えていたが、椅子に座って楽譜を読むことから始まる音楽教育に疑問を持つようになる。パリでのアマチュア演劇体験や民族音楽・舞踊を知った 1 年間のチュニジア滞在経験がある彼は、身体中の根源的な律動を生かして様々な感覚細胞を活性化させるという発想を得る。そして全人格的な音楽性の涵養を目指して、リズムや音程やメロディーを身体で再現して連動した運動として表現するための一連のエクササイズを考案する。ダルクローズのリトミック教育はドイツでも注目されるようになり、1906 年には講演に招かれてドレスデンを訪れ、そこでドールンと出会うことになる。

自らジーヴェルスやリップス¹⁸⁰のもとで文学・美学を学んできたドールンは、ダルクローズ・メソッドに触れてそれが芸術教育の未来を方向付けるものだ と確信し、ダルクローズをヘレラウに招聘して校舎の建設に着手する。ダルクローズにとっても自分の学校の設立はリトミック体操を学科の一つから総合的芸術として発展させる可能性を意味しており、また自分の教育メソッドを社会福祉的教育の課題と結合させることは魅力的な課題でもあった。彼は次のように書いている。「ヘレラウでは、土地とその住民を特別に育てることによって有機的な生と調和を創造することが重要なのだ。彼らの家屋とまったく同じように、モラルと美の建築をリズムによって創造することが重要なのだ。私はリズムをひとつの社会制度の地位にまで高め、自然に広まってあらゆる住民の心の真の証明となるような新しいスタイルを広めていきたい。(…)新しい社会の基礎となるべきは、肉体と精神の健康なのである。」¹⁸¹

1912 年には祝祭劇場を兼ねたダルクローズ学校の教育施設が完成する。自らヘレラウに移住して邸宅のデザインを手がけていたハインリヒ・テッセノウの設計によるもので、とりわけシンクレアが“明るい牧場の上に建つ高くて白い”“ミューズの神殿”と表現したシンメトリックな新擬古典主義様式の祝祭劇場は、ヘレラウの理想を象徴する記念碑的建

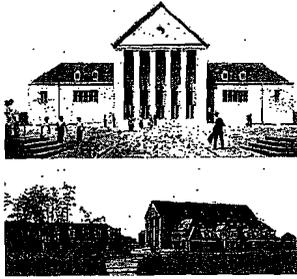
¹⁷⁸ Bücher, Karl, Arbeit und Rhythmus, Leipzig, 1899.

¹⁷⁹ Lorenz, Karl, Der Traum vom „Laboratoire d’une humanité nouvelle, in: Ring, Reinhard(Hrsg.), Hellerau Symposion, Remscheid, 1993. (詩のリズムとメロディーを研究したライプツィヒ大学のエドゥアルト・ジーヴェルスや生理学・心理学的観点で美学を講じたミュンヘン大学のテオドル・リップスなど。)

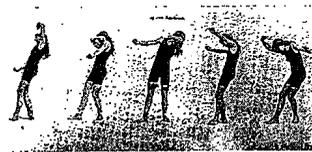
¹⁸⁰ 注 180 参照。

¹⁸¹ 松沢慶信編、『ドイツダンスの百年』、東京ドイツ文化センター、1996. p. 25.

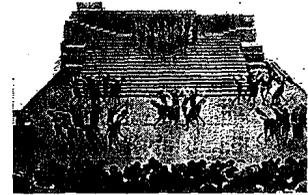
築物となる。ジュネーヴからの転校生 45 名も含めて最初 103 名だったダルクローズ学校の生徒数はすぐに 500 名を越すようになり、年に一度開催される祝祭週間は国際的な注目を浴びてバーナード・ショーやマックス・ラインハルト、ディアギレフやニジンスキーといった著名な舞台芸術関係者たちがヘレラウを訪れるようになる。そしてヘレラウの子供たちは、ダルクローズ学校でリトミック体操を学び、放課後はドイツ・クラフト工芸工房や芸術家コロニーのアトリエに通って工芸を学ぶという、恵まれた芸術教育を享受するのである。¹⁸²



祝祭劇場、正面と寄宿舎を含めた全体像



リトミック体操による 5 拍子の表現



1912 年の祝祭週間におけるリトミックのパフォーマンス

5-5. 芸術家コロニー

ドイツ・クラフト工房の工芸家たちがヘレラウに移住し、彼らの周囲に仲間たちが集い住んで芸術家コロニーが出来るのは言わば自然の成り行きであった。ミュンヘン家具工房の彫金師ゲオルク・フォン・メンデルスゾーン(Georg von Mendelssohn)、彫刻家のパウル・ペータリッヒ(Paul Peterich)を初め、陶芸家やピアニストたちがヘレラウの住環境に惹かれて移り住み、アトリエを建てて芸術活動始める。さらに文筆家や作家たちがそれに続いた。コロニーの発展においてとりわけ重要な役割を果たしたのは出版業者のヤーコブ・ヘーグナー(Jakob Hegner)であろう。ウィーン生まれの文学青年であったヘーグナーはまずライプツィヒとベルリンで文筆及び出版活動の修行時代を過ごす。ベルリンで出版業者としての独立に失敗し、友人のメンデルスゾーンを通じてヘレラウに居を移す。すると修行時代に知り合った作家たちが彼の周囲に集まるようになり、志と向上心を同じくする 20 代の青年たちはすぐにヘーグナーが興した「ヘレラウ出版(Hellerau Verlag)」を拠点として活発な執筆・出版活動始めるようになる。ヘーグナーは特にフランシス・ジャム、ポール・クロデル、ジョルジュ・ベルナノス等によるフランス文学を自ら翻訳出版し、またゲオルク・ビューヒナーやホーフマンスタール、マルティン・ブーパー等の著書や、ヘレラウ在住の作家たちによる作品の出版も手がけた。ヘレラウ在住の作家たちはアルフォンス・パケ(Alfons Paquet)、エミール・シュトラウス(Emil Strauß)、テオドール・ドイブラー(Theodor Däubler)、カミル・ホフマン(Camill Hoffmann)等であったが、その中心的存在はブ

¹⁸² 1913 年には国民学校ができて普通教育も行われるようになるが、ここでもリトミック体操や工芸が教えられていた。

ラハ出身のパウル・アードラー(Paul Adler, 1878-1946)であった。アードラーは「ヘレラウ出版」から詩集や小説を出し、ドイブラーと共に文芸雑誌『総数 Summa』を発刊する。寄稿者の中にはE・ブロッホやH・ブロッホ、R・ムジール等がいた。¹⁸³また14カ国語を解したという語学力を生かしてフランス語による原著から2冊の日本文学研究書¹⁸⁴を翻訳出版するなど、アードラーの活動は極めて多面的であった。アードラーを核としたヘレラウの同業者を訪問する作家たちも多く、ヘーグナーのウィーン時代の友人S・ツヴァイクやG・ハウプトマン、リルケ、後年にはカフカもプラハから訪れており、¹⁸⁵ またH・ヘッセはインドから帰国した後、落ち着き先としてヘレラウも考慮に入れていたと言われている。¹⁸⁶恐らく当時ドイツ語圏では、ルガーノ湖畔のモンテ・ヴェリタと並んでヘレラウも芸術家コロニーとして知られていたであろう。後年作家兼言語学者となるハンス・ユルゲン・フォン・デア・ヴェンゼ(Hans Jürgen von der Wense)がまだ学生だった1919年に、やはり後年画家として名を成す友人のヴァルター・シュピース(Walter Spies)をヘレラウに訪れた時の様子を、次のように日記に記している。「そこには祝祭劇場がある。周りには邸宅が建ち、そこに住むのは芸術家ばかりだ。群れを成して住んでいる。(…)始終誰かが誰かを指さして言う。“あそこに行くのは某氏だ、彼は新しい小説を書いている。あの女性は某嬢だ。君、知らないの？ 誰その娘さんだ、ほらあの記念碑の...。”さながら動物園である。」¹⁸⁷ オールタナティヴ派のモンテ・ヴェリタに比べてヘレラウの芸術家コロニーは多少市民的であったと想像されるが、宗教的寛容さには重きが置かれ、ヘレラウには教会が建設されることがなかったと言われている。

5-6. ヘレラウの試練

ヘレラウの試練は第一次世界大戦と共に訪れる。1914年、共同体の牽引役だったヴォルフ・フォールンがスキー事故によって他界してしまう。彼の役割は弟のハインリヒ・ドールンに引き継がれるが、次いでスイスに一時帰国していたダルクローズがドイツ軍によるストラスブル聖堂への空爆を批判したことからドイツに再入国できなくなり、ダルクローズ学校も閉鎖され赤十字の検疫所として接収されてしまう。ヘレラウ建設の続行は経済的に困難になり、当然計画の縮小を余儀なくされる。例えば小住宅の住人が経済力の向上に従って転居できるように計画されていた中規模住宅の建設が断念され、共同体内の住民の成長という構想が実現不可能になってしまいます。また、ナチズムの台頭につれ

¹⁸³ Sarfert, *ibid.*, p. 52.

¹⁸⁴ Adler, Paul, *Japanische Literatur : Geschichte und Auswahl von den Anfängen bis zur neusten Zeit*, Frankfurt am Main, 1926. [Der Inhalt ist zum größten Teil eine Übers. von: *Anthologie de la Littérature japonaise des origines au XXe siècle* von Michel Revon, Paris, 1910.]

Adler, Paul, *Sachwörterbuch zur japanischen Literatur*, Frankfurt am Main, 1926.

¹⁸⁵ Sarfert, *ibid.*, p. 114f.

¹⁸⁶ *ibid.*, p. 103.

¹⁸⁷ Hans Rhodius (Hrsg.) *Schönheit und Reichtum des Lebens* Walter Spies, Den Haag, 1964. p.87.

て人種間の軋轢が顕在化し、結果としてメンデルスゾーン、ヘーグナー、アードラー等活動の中心にあったユダヤ系住民がヘレラウを去ったことは芸術家コロニーにとって大きな損失であった。ダルクローズ学校の祝祭劇場は、第三帝国時代はナチ党の、大戦後はソビエト軍の施設となるが、第一次大戦以降のヘレラウの歴史については今後の研究発表において報告を行うつもりである。

6. 今後の研究計画

ドイツ世紀転換期の生活改革運動がドイツ文化にもたらした影響を検証するためにはさらなる研究を必要とする。今後はヘレラウの戦後史を含め、ドイツ語圏に存在するその他の田園都市や芸術家コロニーに関して研究を行い、特にそれぞれにおける生活改革理念の特徴と実現に関して研究成果の発表を行っていくつもりである。同時に、生活改革運動の思想的源流とも言えるドイツのユートピア思想の系譜についてもさらに研究・考察していく必要がある。また、ヘレラウに滞在した芸術家として、最近日本でもようやく著書が出始めたドイツ人画家ヴァルター・シュミットの伝記に関する研究も、そのうち共著としてまとめる計画である。

【その他の参考文献】

1. Arnold, Klaus-Peter, Vom Sofakissen zum Städtebau, Dresden · Basel, 1993.
2. Bajohr, Frank, Zwischen Krupp und Kommune, Essen, 1988.
3. Creese, Walter L., The search for environment: the garden city – before and after, Yale University Press, 1966.
4. Durth, Werner (Hrsg.), Entwurf zur Moderne, Stuttgart, 1996.
5. Lorenz, Karl, Wege nach Hellerau, Dresden, 1994.
6. Mendelssohn, Peter de, Hellerau Mein Unverlierbares Europa, Dresden, 1993.
7. Reulecke, Jürgen (Hrsg.), Geschichte des Wohnens Bd.4. 1918-1945. Stuttgart, 1997.
8. Tarn, John Nelson, Working-class Housing in 19-centuriy Britain, London, 1969.
9. W・アシュワース『イギリス田園都市の社会史』下總薫監訳, 1987.
10. 伊達功『ユートピア思想と現代』創元社, 1971.
11. ハリー・ケスラー『ワイマル日記(上・下)』松本道介訳、富山房、1993.
12. アーサー・コーン『都市形成の歴史』鹿島研究所出版会、1968.
13. ウルリヒ・コンラーツ／ハンス・G・シュペルリヒ『幻想の建築』、彰国社、1966.
14. 佐藤明『クルップ兵器工場』六興商会出版部刊、1942.
15. マンフレッド・シュパイデル／セゾン美術館『ブルーノ・タウト 1880-1938』トレヴィル、1994.
16. 高柳俊一『ユートピアと都市』産業能率短大出版部、1975.
17. 『独逸国クルップ會社ニテ千九百十二年に於イテ舉行シタル創立記念百年祭ノ祝祭史抜萃』

18. 平井正『ベルリン：1918—1922』せりか書房、1980.
19. L・ベネヴォロ『近代都市計画の起源』横山正訳、鹿島出版会、1976.
20. ウィルヘルム・ベルドロー『鉄鋼王クルップ』生活社、1939.
21. M・L・ベルネリ『ユートピアの思想史』手塚宏一・広川隆一訳、太平出版社、1972.
22. E・ヨーハン／J・ユンカー『ドイツ文化史』三輪晴啓他訳、サイマル出版会、1975.
23. ウォルター・ラカー『ドイツ青年運動』西村稔訳、人文書院、1985.
24. ジル・ラプージュ『ユートピアと文明』中村弓子他訳、紀伊国屋書店、1988.
25. ウルリヒ・リンゼ『生態平和とアナキー』内田俊一他訳、法政大学出版局、1990.
26. 同『ワイマール時代の予言者たち』奥田隆男他訳、ミネルヴァ書房、1989.

以上